

序 文

宮崎県立図書館主催の「宮崎県文化講座」は、昭和四十九年度から「宮崎県地方史講座」として開設し、平成十九年度から地域の歴史のみならず、自然科学などの分野にも範囲を広げることにより、幅広い文化の発信と理解を目指して、「宮崎県文化講座」と改称し現在に至っております。

これまで、宮崎県の歴史・民俗をはじめとした人文社会学や自然科学・文化・芸術など、様々な分野で活躍され、県内文化に影響を与えていらっしゃる方々を講師として招聘し、講座を開講しており、講座の内容は宮崎の歴史・文化等に関する調査・研究に資するため、文章としてまとめて「宮崎県文化講座研究紀要」（第三十三輯までの名称は「宮崎県地方史研究紀要」）に掲載しております。

令和六年三月に完成したドキュメンタリー映画『中村地平』の公開により作家・中村地平への関心が高まる中、令和六年度は一般財団法人台湾協会評議員（台湾文学研究家）の河原 功氏による講座「中村地平と台湾」と、同氏に加え宮崎大学名誉教授 岡林 稔氏と美術家兼映画監督の小松 孝英氏の三名の方々による鼎談「作家・中村地平」を開催しました。

その内容をまとめた今回刊行の「宮崎県文化講座研究紀要」第五十一輯が、「ふるさと宮崎」の歴史や文化の研究の一助となり、県民の皆様の生涯学習に役立つことができ、幸甚に存じます。

結びに、今回の「宮崎県文化講座研究紀要」に御寄稿いただきました講師をはじめ、鼎談に参加された方々、講座開催にあたり御協力をいただきました関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

令和七年三月

宮崎県立図書館長 平山 文春

目次

一	河原功	講座「中村地平と台湾」 ・ ・ ・ ・ ・ 1 }
二	岡林稔・河原功・小松孝英	鼎談「作家・中村地平」 ・ ・ ・ ・ ・ 21 } 51

「中村地平と台湾」

一般財団法人台湾協会評議員（台湾文学研究家）

河原 功

目次

はじめに

- 一 台北高校時代の中村地平
 - 二 新進作家としての中村地平
 - 三 真杉静枝との同棲
 - 四 台湾への取材旅行
 - 五 台湾に取材した作品
 - 作品紹介1―「蕃界の女」
 - 作品紹介2―「霧の蕃社」
 - 作品紹介3―「蕃界近き村」
 - 作品紹介4―「長耳国漂流記」
 - 作品紹介5―「花多き島」
 - 作品紹介6―『あをば若葉』
 - 六 地平にとっての台湾
 - 七 中村地平の不可解な言動
 - (一) 中学卒業後の一年間
 - (二) 台北高校受験の動機
 - (三) 長篇小説『あをば若葉』の謎
- おわりに

中村地平と台湾

河原 功

はじめに

宮崎県出身の作家中村地平（本名・治兵衛^{じべえ}、一九〇八—一九六三）は、芥川賞候補に三度もあげられた（戦前は「土龍^{もぐら}どもぼつくり」と「南方郵便」で二度、戦後は「八年間」で一度）が、これまで研究対象にされることはほとんどなかった。

それでも、森永国男『太宰と地平』（鉾脈社、一九八五年四月）、岡林稔『《南方文学》その光と影 中村地平試論』（鉾脈社、二〇〇二年二月）、阮文雅「中村地平「華僑たち」に描かれた日本軍の虚像」（『植民地文化研究』第三二号、二〇二四年二月）がある。さらに、蜂矢宣朗『南方憧憬—佐藤春夫と中村地平』（鴻儒堂出版社、一九九一年五月）、拙著『台湾新文学運動の展開—日本文学との接点』（研文出版、一九九七年一月）もあるが、地平が台湾と深く関わっていたこと、地平の作品の中核をなしていたのが台湾だということに注目した研究は非常に少ない。

一 台北高校時代の中村地平

宮崎県立宮崎中学校を一九二五年に卒業した中村地平は、翌一九二六年に台湾総督府高等学校（一九二七年に台湾総督府台北高等学校と改称）の高等科（文科甲類）に第二回生として入学した。

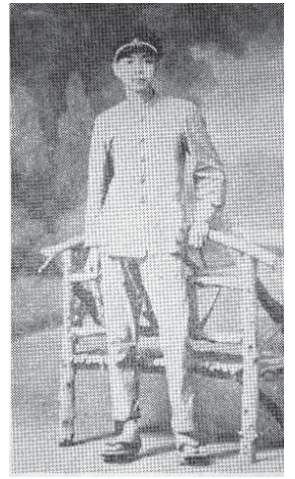
旧制の高等学校は、卒業生の99%は大学に進学するという、エリート青年の在籍する学校だった。

官立では、「ナンバー校」と称せられた第一高等学校（東京）に

始まって、第二（仙台）、第三（京都）、第四（金沢）、第五（熊本）、第六（岡山）、第七（鹿児島）、第八（名古屋）の八校と、「地名校」である弘前、山形、新潟、水戸、松本、浦和、東京、静岡、松江、大阪、姫路、広島、山口、松山、高知、福岡、佐賀の一七校が設置された。公立では府立、富山、浪速の三校が設置された。また、台湾総督府所管の台北高等学校、関東局所管の旅順高等学校があった。私立では成蹊、成城、武蔵、甲南の四校が設置された。合計すると高等学校は三四校であった。さらに、帝国大学入学資格が高等学校と同等なものとして認められた学校に北海道帝国大学予科、京城帝国大学予科、台北帝国大学予科、それに私立では学習院高等科の四校があった。

その中で七年制（四年間の尋常科十三年間の高等科）の高等学校を設置していたのは、官立では二五校のうち東京高等学校ただ一校、公立では府立、富山、浪速高等学校の三校すべて、私立では成蹊、成城、武蔵、甲南高等学校の四校すべて、それに台北高等学校を加えての、合わせて九校だった。

高等科は文科と理科とに分かれ、甲類は第一外国語が英語（第二外国語は独語）、乙類は第一外国語が独語（第二外国語は英語）となっていた。授業時数の40%は語学だった。異色なのは東京高校で、最初の官立七年制高校として一九二二年に発足、一九二五年に高等科に文科・理科とも甲、乙、丙（第一外国語が仏語）三類を完備した唯一の高校となった。



中村地平
(台北高校時代)

中村地平が日本内地の高等学校に進学せずにわざわざ台湾の高等学校を選んだのには、佐藤春夫(一八九二—一九六四)の作品を読んだの影響が大きかった。

佐藤春夫は、郷里和歌山の新宮に帰省中に、偶然新宮中学時代の親友東熙市(ひがしきいち)と邂逅する。東は台湾打狗(後の高雄)で齒科医院を開業していて、台湾に戻るにあたって春夫を誘ったのだった。結局東の勧めで春夫は一九二〇年に台湾を訪問、滞在三カ月に及んだ。台湾各地を巡っての体験から春夫は童話「蝗の大旅行」(『童話』一九二一年九月)、原住民伝説に取材した小説「魔鳥」(『中央公論』一九二三年一月)、日月潭紀行に絡んで涵碧楼(旅館)の哀れな女人の物語を織り交ぜた小説「旅びと」(『新潮』一九二四年六月)、サラマオ蕃事件直後の霧社に入山した際の体験をもとにした小説「霧社」(『改造』一九二五年三月)、台南の安平を舞台にした異国情調溢れる春夫の代表作「女誠扇綺譚」(『女性』一九二五年五月)などを発表していった。地平は春夫のそれら台湾に取材した作品に魅入られ、台湾への憧憬を抱いたのだった。

また、台北高校では日本内地からの生徒を受け入れるために、福岡での受験会場も設定されたこと、数学の苦手な地平にとって受験科目に数学がなかったことも、台北高校への受験を決断させる要因でもあった。随筆「三等船客」(『仕事机』筑摩書房、一九四一年三月)で地平は次のように記している。

幼い頃から南方に強く心をひかれてゐた僕は佐藤春夫氏の「女

戒扇奇譚」や「旅びと」など、台湾を題材にした小説のいくつかをよむと、矢も楯もたまらない気もちになった。九州のM中学を卒業すると、ひとつには入学試験に数学もなかったところから、僕は台湾の高等学校を受けた。

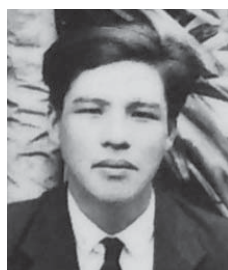
台北高校に入学した地平は、塩月起、濱田隼雄、土方正己、鹿野忠雄らの友人に恵まれ、初代校長三澤糾、第二代校長下村虎六郎(後に『次郎物語』の作者下村湖人)、林原耕三(英語、俳人)や杉山産七(ドイツ語)などの教授から文学指導も強く受けた。ことに杉山教授からは、小説の出来がよい時にはビールを飲ませてもらったという。



三澤糾校長



下村虎六郎校長



杉山産七教授

地平は在学中に、濱田隼雄、塩月起、今澤正雄、蔭山泰敏、土方正己ら六人で一九二七年二月に同人誌『足跡』を創刊した。表紙絵は塩月起の父桃甫(本名・善吉)画家、台北高等学校図画教師)の描く、真っ赤な地に芭蕉の樹という斬新なものだった。地平は、この『足跡』に台湾の高等学校へ旅立つ不安な心境を綴った「首途」(創刊号、一九二七年二月)、台湾の若き小学校教師の悩みを扱った「或宵の尾寺」(第二号、一九二七年五月)、山陰の漁村を舞台にした「浦」(第三号、一九二八年三月)等を発表。同人誌『足跡』は第三号(一九二八年三月)をもって終刊となった。『足跡』創刊から終刊にいたる経緯については、濱田隼雄が「三步で消えた「足跡」」(『台北高等学校』蕉葉会、一九七〇年十二月)で詳述している。



『足跡』創刊号



『翔風』第7号

『足跡』が終刊してからの地平は学友会誌『翔風』と深く関わり、第六号（一九二八年一月）と第七号（一九二九年二月）では編集兼発行人となる。『翔風』を舞台にして「発狂」（第六号）、「天理教」（第七号）、「僕の場合」（第八号、一九二九年一〇月）といった小説を発表する。これらの習作を発表することで、地平は文学的素養を磨いていった。また、短歌会にも属して、「雲走る畑に起き出で一総の葡萄ちぎれりこの朝はじめて」（第六号）、「暗うなれる池面に木の葉漂へり昼寝せし間に風さへ立ちて」（第七号）といった短歌も発表する。書評「ゴリキイの「母」（第八号）も発表している。『翔風』との関係は卒業後にも及び、良鰥一の筆名で創作「廃れた港」（第九号、一九三二年二月）を寄稿している。『翔風』は台北・南天書局からの復刻版で容易に見ることができる。

一九二八年一月、台北高校では第一回記念祭が開催された。装飾教室の公開、文科理科対抗競技、菊花展覧会、山岳展、人形絵画展などは台北高校校内で実施された。映画会、音楽会、演劇は、まだ講堂がなかったため、台北駅前の鉄道ホテルで開催された。劇の公演は記念祭の最大の呼び物で、定員五〇〇名の演舞場に延べ二三〇〇名を集客する盛況ぶりだった。上演後、台北帝大教授矢野峰人（本名・禾積 英文学、詩人）の絶賛を得たという。記念祭の詳細は、『翔風』第七号に収録された総務部「学友会報告」や富安虎太「記念祭演劇評」に詳しい。

このとき、地平は、所属する文科二年甲類の演劇公演のため、ダンセニイ作「山の神々」(The Gods of the Mountain)の脚本を書いた。ダンセニイ (Lord Dunsany 一八七八—一九五七) はアイルランドの男爵で小説家、軍人でもある。一二歳の時に父親の死去により爵位を継承した。成人後はイギリス陸軍に入隊、一八九九年に南アフリカでの第二次ボーア戦争に従軍、第一次世界大戦ではフランスなどへ出征した。作家としては一九〇五年の『ペガナ神々』の自費出版に始まる。戯曲「山の神々」は一九一一年初演、七人の乞食が山にまつられた神々になりすまして施しを得ようとするところから始まる物語である。

一九二九年一〇月の第二回記念祭で地平は、脚本部の責任者も務めた。演劇の会場は、新築となった台北高校講堂だった。初日二七日の劇公演はジュール・ロマン「アメデと靴磨台上の諸君」（理科一年乙類）、有島武郎「ドモ又の死」（文科一年乙類）、ゴオリキイ「どん底」（七星寮）、翌二八日の公演はル・メルデン「炭坑夫」（文科二年甲類）、金子洋文「息子」（文科一年甲類）、北村壽夫「怪しい貨物船」（理科二年乙類）で、どれも社会派劇と呼ばれるものだった。一九三〇年一月に、林芙美子（一九〇三—一九五二）、北村兼子（一九〇三—一九三一）、望月百合子（一九〇〇—二〇〇二）、生田花世（一八八八—一九七〇）ら一〇名が婦人毎日新聞社主催の「婦人文化講演会」の講師として台湾を訪れた。講演会は一月五日から一五日にかけて、台北から屏東までの九カ所の都市や地方で行われた。講演会場はどこも盛況だったと報じられたが、講演は厳しい言論規制と監視態勢のもとで実施された。地平たち文芸部でも、日時是不明だが、林芙美子の歓迎会を開催した。

また、地平は、彼女たちの宿泊する旅館「吾妻」を訪ね、林芙美子と生田花世を台北市街に案内したことがあった。林芙美子から「どこもありふれている。台湾らしい変わった所、台北にしかないびつ

くりするような場所へ連れていったよ」と言われ、同級生の佐藤哲男と相談の結果、彼女たちを案内したのが、施乾（一八九九—一九四四）が一九二二年に設立した「愛愛寮」だった。乞食の収容施設で、その臭気と異様な光景、彼女たちにすがりついてうめき声をあげる乞食に、二人は悲鳴を上げて逃げ出した。顔面は蒼白となり、引きつっていた。彼女たちのそれまでの勢いは一気に喪失したという。この一件は、佐藤哲男「地平さん」（『火山地帯』第四七号、一九八一年七月）に詳しい。

生田花世の随筆「台湾に寄せる感想」（短歌中心の文芸誌『台湾』創刊号、一九四〇年四月）でも、林芙美子と一緒に「訪ねて来た一人の日本青年の案内で萬華の龍山寺を参詣し、そこから中歩き、乞食を収容してゐる愛々寮の中をずっと見た」という一文がある。一〇年前の衝撃的だった出来事を生田は忘れずにいるのだった。その青年とは、台北高校生だった中村地平のことである。

地平の台北高校生活が充実したものだっことは、半ば自伝小説とも言える書下ろし長篇小説『あをば若葉』（博文館、一九四二年五月）から十分うかがうことができる。佐藤哲男もまた、『蕉葉の章』（作品集『蕉葉の章』、一九九六年四月）で地平（作中では「野村」）を登場させて、学友たちとの交友を描いている。

二 新進作家としての中村地平

一九三〇年、地平は台北高校を卒業（一年留年したので第三回卒業生）、東京帝国大学文学部美術史料科に入学する。在学中から井伏鱒二（本名・満壽二 一八九八—一九九三）に師事、太宰治ら若い作家仲間との交友も深まる。

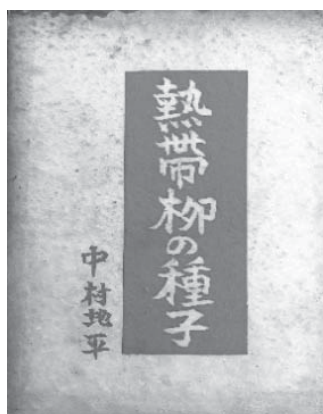
一九三二年一月には津村秀夫、弟の信夫、植村敏夫と同人誌『四人』を創刊する。津村秀夫と植村敏夫は七高時代の仲間、地平と植

村とは同郷の友人だった。同誌に地平は、台湾と縁のある作品「鯨の Copulation」（第一号、一九三二年一月）、「魔港淡水」（第二号、一九三二年二月）、「白雲がなぜ窪地のうへに縋^{たなび}いてゐるか」（第三号、一九三二年四月）、「南海の紀」（第五号、一九三三年一月）を発表する。同人誌『四人』は第五号をもって終刊となった。

この間に地平は、台湾での下宿生活の一端を扱った「熱帯柳の種子」（『作品』一九三二年一月）を井伏鱒二の斡旋で発表する。これが佐藤春夫に評価され、地平は新進作家として文壇に認められるようになる。



中村地平
（東京帝大時代）



『熱帯柳の種子』
（版画荘、1938年3月）

一九三四年に美術史料科を卒業した地平は大学院に進学したものの、間もなく大学院を退学する。台北高校時代の友人土方正己の紹介で都新聞社（現東京新聞）に入社、編集局文化部に所属、そのかたわら文学活動に勤しむ。翌三五年には『日本浪漫派』同人に参加、三六年に都新聞社を退社して創作に専念する。そして、「土龍^{もぐら}どもぽつくり」（『日本浪漫派』一九三七年五月）で第五回芥川賞候補（一九三七年上半期）となり、「南方郵便」（『文学界』一九三八年四月）でも第七回芥川賞候補（一九三八年上半期）となる。いずれも南九州を舞台にした創作で、南国的牧歌調の漂う作品だが、芥川賞受賞には届かなかった。

さらに第八回芥川賞（一九三八年下半期）では、「離れ島にて」（『文

芸』一九三八年二月）が予選候補に上げられた。「離れ島にて」は、人を踏み台にしてエゴイステイックな生き方を送る台北高校時代の友人を冷徹な目で見つめる作品である。

芥川賞の受賞には届かなかったが、地平は太宰治、小山祐士とともに「井伏鱒二門下の三羽鳥」と称せられ、中堅作家としての地位を得る。

太宰治（本名・津島修治 一九〇九—一九四八）は青森県津軽の生まれ、弘前高校卒、東京帝大文学部仏文科に入学するも後に除籍。井伏鱒二に師事した。「逆行」（『文芸』一九三五年二月）で第一回芥川賞候補（一九三五年上半期）に選ばれたが、受賞を逃した。受賞したのは石川達三「蒼氓」（『星座』一九三五年四月）だった。

小山祐士（一九〇六—一九八二）は広島県福山市の生まれ、慶応義塾大学法学部卒（一九三一年）。在学中は小山内薫に私淑、卒業後は井伏鱒二、岸田國士に師事した。戯曲『瀬戸内海の子供ら』（白水社、一九三五年二月）で第二回芥川賞候補（一九三五年下半期）に選ばれたが、戯曲は対象外ということで受賞にいたらず、第二回芥川賞は「受賞作なし」となった。だが、選考委員会では『瀬戸内海の子供ら』が最も高く評価され、小山は劇作家としての地位を確立した。

芥川賞を獲得することは、文壇への登竜門として最高の荣誉であった。初期の段階から、芥川賞には新人作家の心を躍らせ、あるいは乱すものがあつた。太宰は選考委員の佐藤春夫宛に、長さ四メートルの巻紙に毛筆で「芥川賞をぜひ下さい」と哀願する長文の手紙を出した。

作家の城夏子（本名・福島静 一九〇二—一九九五）は、地平の口から「芥川賞、僕欲しいなあ。貰わなきゃあ」と発せられたのを「学生服の地平さん」（『中村地平全集2 月報』皆美社、一九七一年四月）に書き残している。

島尾敏雄（一九一七—一九八六）は、「芥川賞にもれて中村地平は声をあげて泣き太宰治は錯乱したといううわさ」を耳にしたことを「宮崎の中村地平さん」（『中村地平全集3 月報』皆美社、一九七一年七月）に書き記している。

そのいっぽうで、「歌と門の盾」（『作家精神』一九四〇年三月）で第一回芥川賞（一九四〇年上半期）に選ばれた高木卓は受賞を辞退、その結果第二回芥川賞は「受賞作なし」となった例もある。しかし、芥川賞は授賞せずとも、芥川賞候補となったことで、文壇で評価され、優れた作家は多い。芥川賞を獲得したものの、埋もれていった作家も少なくない。

三 真杉静枝との同棲

一九三四年に都新聞社に入社した地平は、程なくして七歳年上の真杉静枝（一九〇一—一九五五）と同棲を始める。地平が真杉と縁を持ったのは、一九三〇年一月に林芙美子らの歓迎会を台北高校文芸部が催した折に、林芙美子から台湾出身の真杉の作品を知らされて以後真杉と文通するようになったのが始まりだった。真杉の父千里が台湾南部で神社の宮司であつたことで、真杉は少女時代を台湾で育つた。台湾での生活体験を共有していたことが地平と真杉を接近させた一因と言えよう。しかし、二人の関係は数年間だった。



真杉静枝

真杉と親交の深かった円地文子（本名・圓地富美 一九〇五—一九八六）は「真杉さんの愛情行路」（『旅よそい』三月書房、一九六四年一月）で語っている。

「中村氏との新井葉師時代の生活は、真杉さんの生涯を通して一番謙遜な、一番清潔な時ではなかったかと思える……（中村さんは）両家育ちの気弱いお坊ちゃん風の人で、両親や兄弟との関係も濃く、真杉さんと愛しあっても——恐らく真杉さんの情熱に動かされて同棲したのであるうが——思いきって結婚を発表する勇氣はなかったらしい。真杉さんの方ではそれを強く望んでいたので別れるのも容易でなく、四五年の間ずるずに同棲生活がつづいた。しかし、中村さんと結婚したい意志の強い間、真杉さんはかなりの世話女房にもなったし、中村さんの文学の仕事にも最大の敬意と愛情を捧げているようだった。」

また、講談社で『小説現代』『群像』編集長を経て文芸出版部長、文芸局長、取締役を務めた大村彦次郎はその著書『荷風百閒夏彦がいた——昭和の文人あの日この日』（筑摩書房、二〇一〇年八月）で語っている。

「（地平が）七歳年上の女流作家真杉静枝に押しかけられ、いつのまにか同棲するようになったのも、南国育ちらしい彼の人の好きからだった。（中略）二人の同棲生活が始まると、一軒の借家に地平が階下に、真杉が二階に暮らした」

武者小路実篤、中村地平、中山義秀と遍歴を辿った真杉に対する文壇の評価は、石川達三『花の浮草』（新潮社、一九六五年八月）や林真理子『女文士』（新潮社、一九九五年一〇月）でも描かれており、実に冷淡だった。北原武夫は、繊細に見えながら神経の粗っぽい真杉に地平は閉口し失望していたようだ。「地平さんのこと」（『中村地平全集2 月報』皆美社、一九七一年四月）で記している。

いっぽう、真杉を好意的に評した作品は、十津川光子『悪評の女』（虎見書房、一九六八年一月）くらいしかない。また、地平と親しかった恩師松村一雄（台北高校教授）が、真杉との同棲は地平の作家生活を側面から応援するものだったと、「川端の宿」（『中村地平全集3 月報』皆美社、一九七一年七月）で述べているのは貴重な証言だ。地平と真杉との同棲については、真杉の作品「小魚の心」「ながれ」「ひなどり」などに散見でき、地平の「八年間」（『群像』一九五〇年一〇月）や「発端」（『ポリタイア』一九七一年二月）などからも窺い知ることができる。

四 台湾への取材旅行

地平は、惜しくも芥川賞を逃したことでの失意、太宰との不和、ほどなくして真杉との同棲生活の行き詰まりもあって、スランプ状態にあった。

地平はスランプ状態からの脱出をはかりたい、作家として更なる飛躍を遂げたいと、一九三九年に取材旅行として台湾各地を訪れる。これは拓務省の肝煎りで出来た「大陸開拓文芸懇話会」の一員として実現したもので、地平にとって台北高校卒業以来一〇年ぶりの台湾再遊だった。真杉静枝も同道していた。三月八日、二人は大和丸に乗船、甲二等の一室に落ちつく。台湾での静枝は病気の母を見舞うために嘉義に向かった。

地平の台湾滞在は三月一〇日から四月八日までの約一ヵ月（真杉の台湾滞在も約一ヵ月）だった。台湾到着の翌二日に明治製菓で、^{おやま}小山捨男・須藤利一・松村一雄教授も出席しての台北高校新聞部・文芸部合同の中村地平歓迎会が開催された。台湾を離れる間近の四月四日には、台北高校会議室で文芸部主催の中村地平講演会が開催された。詳しくは「学内ニュース」（台北高校新聞部『台高』第二三号、

一九三九年六月）が報じている。

四月五日には、ラジオで「南へ寄する心」と題して二〇分ほど、台湾での感動と、それに関連する南方的な文学について講演を行った。

地平は一日四間を台北で過ごし、一六日間を台湾一周に費やした。地平の訪れた地域は多く、「板橋、台中、彰化、鹿港、日月潭、霧社、台南、安平、高雄、屏東、サンティモン社、恒春、四重溪、ガランピ、高士佛社、知本温泉、台東、吉野村、花蓮港、タロコ等の町や、名所などを見て歩いた」と、また、「僕は一文学書生としては、分に過ぎるほどの便宜を各方面から与へられた。汽車、バスの無料パスが給与されたし、各地方庁の大半から自動車を出して貰った。視察に必要な場合は案内人もつけて貰った」と、「旅びとの眼―作家の観た台湾」（『台湾時報』一九三九年五月）で記している。地平は、一九二〇年に台湾を訪れた佐藤春夫が下村宏民政長官のはからいで役所から数々の便宜と歓待を示してもらったことを思い起こしたことだろう。

芥川賞受賞に今一つ届かなかった地平の心を癒すこの台湾旅行は、よきカンフル剤だった。台北高校での恩師や後輩たちとの交友もあり、充実した台湾訪問だった。東京に戻って二日後には、地平は台北高校生に向けて、その感動を綴っている。「若い友達へ」（『台高』第一三号、一九三九年六月）で、「僕自身も、台湾に在る高等学校で学んだことに、十分の誇りと、自信を持つてゐる」と記している。

地平は今回の台湾再遊で「小説的な材料は実に無尽蔵である」、「台湾はわれわれ小説家にとつては全く未開拓の処女地である。台湾旅行はスラムに陥ち入つてゐる小説家にとつては、案外起死回生の妙薬かもしれない」（『旅びとの眼』『台湾時報』第二三四号、一九三九年五月）と、収穫の多かったことを述べている。

五 台湾を題材にした作品

地平はこの台湾訪問をもとに、「蕃界の女」（『文芸』一九三九年九月）、「霧の蕃社」（『文学界』一九三九年十二月）、「蕃界近き村」（東京・満洲移住協会『新満洲』一九四〇年二月）を発表する。そして、「南方的な文学が持つ多くの美点」を認識した地平は、彼自身が考えている文学の指標として「南方文学の樹立」（中村地平「南方的文学」、「知性」一九四〇年九月）を掲げ、長編小説「長耳国漂流記」（『知性』一九四〇年一〇月〜四一年五月）の連載を開始する。地平は「本島人の生活も旅の心をひくが、それよりもつと興味があるのは蕃人のそれである」（『台湾の風物』『海』大阪商船、一九三九年一〇月）と述べており、地平の関心は原住民に向けられていたため、原住民を題材とした作品が多い。

そのいっぽうで、台湾の女学校を舞台にした連載小説「花多き島」（『少女画報』一九三九年一月〜）、台北高校を舞台とした書下ろし長篇小説『あをば若葉』（博文館、一九四二年五月）もある。青春時代への回帰からだろうか。なお、『あをば若葉』は陸軍報道班員としてマレーに派遣されている一九四二年に出版されたが、「花多き島」は戦後になってから『白百合先生』と標題を改めて一九四六年にやっと出版された。

作品紹介1―「蕃界の女」

「蕃界の女」（『文芸』一九三九年九月）は、旅人の由谷三吉（絵描き）が知本温泉で知りあった山名（小説書き）とともに東海岸沿いにバナナ、ピナン、吉野、花蓮港を旅行して、タロコのタツキリ館に着いた所から始まる。三吉は、東京で「ある女と不仕合せな結婚生活を営んでゐる」ため、そこから逃れるために台湾を訪れた。

一方、山名は台北高校卒、東京に住み、一〇年ぶりの台湾再遊だった。三吉も山名も地平の分身ということになる。二人は近くの「蕃社」（原住民部落）を訪ねる。そこで「蕃婦」（原住民女性）シバル・イワルと出会い、瓢箪や布織物を買うが、そのやり取りはおもしろい。夜にまた、今度は米酒を土産に提げて頭目の家を訪ねる。イワル、その夫、頭目の三人が米酒を奪いあう光景、彼らの話のやり取りなどを、三吉は微笑ましく受け止めている。

ところで、「蕃界」「蕃社」「蕃婦」という言い方は、当時は問題視されなかったが、「蕃」は「生蕃」「蕃人」とともに台湾原住民族を指す蔑称である。



『蕃界の女』
(新潮社、1940年5月)

作品紹介2ー「霧の蕃社」

「霧の蕃社」（『文学界』一九三九年一二月）は、霧社事件をテーマにした小説。

霧社事件は、一九三〇年一〇月に台湾中部の山地「霧社」で勃発した原住民の武力蜂起事件で、日本人一三四人が惨殺された。台湾人犠牲者はわずかに二人、日本の着物を着ていた者と流れ弾に当たった者、したがって明らかに日本人を対象とする武力蜂起であった。霧社の人口が最多となる、年一回の霧社小学校と公学校の合同運動会当日を狙って決行したもので、開会式前までには付近の駐在所が次々と襲われていた。原住民蜂起の情報が事前に漏れることな

く、周到に計画された蜂起であった。

蜂起の原因は総督府の「理蕃政策」の欠陥によるものだったが、原住民を統治する山地警察官の横暴や無理解など数多いものだった。首謀者はマヘボ社の頭目モーナ・ルダオ、蜂起に参加した村は「霧社蕃」一一社のうち六社（二三六人）。事件の鎮圧には警察だけでは不可能と判断され、即座に台湾軍に出動命令が下されて、山砲による砲撃、飛行機からの爆弾投下、国際法で禁止された毒ガスも散布された。最前線には「味方蕃」（蜂起に加わらなかった原住民）に武器弾薬を与えて、蜂起した「反抗蕃」を攻めさせた。そして、「味方蕃」には、殺害した原住民にに応じて賞金を与えていった。頭目や勢力者は高額だったが、子供を殺害しても賞金は支給された。霧社事件は海外でも報じられ、日本の帝国議会でも論議され、石塚英蔵台湾総督の更迭にまで発展した。

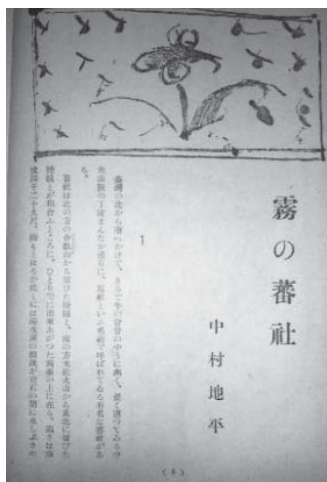
霧社事件をテーマにした小説は数多いが、その最初は地平の「霧の蕃社」だった。執筆には、水越幸一（事件勃発当時の台中州知事）から話を聴く機会が幸いしたという。だが、「霧の蕃社」の発表は、事実の多くが隠蔽されていたこともあって、霧社事件の詳細は語られていない。総督府の公式発表「霧社事件の顛末」の域を出ていない。

さらに、事件鎮圧後に「味方蕃」から武器弾薬をスムーズに回収するにあたって、警察官黙認の上で「保護蕃」襲撃をさせるという「第二霧社事件」もあった。「保護蕃」とは投降した原住民のこと、女性や子供が多くを占めていた。これによって、「反抗蕃」六社の原住民は一二三六人から二九八人に減少した。そして、わずかに残った「保護蕃」は、霧社から遠く離れた川中島（現・清流）に徒歩で強制移住させられ、警察の厳しい監視下のもと、限られた狭い場所で生活することになった。しかし、蜂起に加わった者のあぶり出しは続き、処刑された原住民は少なくなかった。また、平地での生活に慣れず自殺したもの、病死した者もいて、村の人口は更に減少し

た。

「霧の蕃社」はモーナ・ルダオが仲間と離れて姿を消す十一月一日日まで、そして次男タダオ・モーナの縊死体が発見される一二月一〇日で終わっているため、「第二霧社事件」には全く触れられていない。だが、武力抵抗に走った霧社の原住民への地平の眼差しは優しい。彼らが蜂起せざるを得ない状況に追い詰められていたことに地平は同情を寄せている。

首謀者モーナ・ルダオの遺体は三年後になって発見され、標本として台北帝大の土俗学教室に運び込まれた。粗末な棺桶に収められ、無造作に床に放置されたまま、戦後は台湾大学考古人類学系となっても、一九七〇年代半ばまでそのまま放置され続けた。地平はこのモーナ・ルダオの遺体を一九三九年の台湾訪問時に見ている。



作品介绍3―「蕃界近き村」

「蕃界近き村」(『新満洲』 東京・満洲移住協会、一九四〇年二月)は、台湾東部の移民村「吉野村」を舞台にした短編小説。

官営移民村として総督府が設置した「吉野村」は、その当初、土地は荒れていて開墾が進まず、甘蔗や陸稻を作っても生産高は少なく、衛生状態も悪く、マラリア等の風土病に冒され、アミ族の襲撃も受けるという危険な地域だった。

物語は次のとおり。

青年吾一は、彼を慕う蕃人の娘テウスから蕃人たちが村を襲撃する情報を聞き出す。二日後の満月の夜に小学校が焼き討ちされる計画を知った吾一は、異変を伝えに役場に走る。その夜、村の青壮年は千名近くが役場に集まり、武装を整えて各部署に出動。夜が明けると、蕃界に向けて駐在所からの山砲と、花蓮港に到着した軍艦からの威嚇砲撃が夕方まで続いた。恐れをなした蕃社が帰順を申し出たことで、村は蕃人の襲撃を免れた。吾一のお蔭だった。仲間の秘密を内地人に漏らしたことに良心の呵責をおぼえたテウスは、帰順式の行われたその日、村を出て霧社部落へ向かった。その後の行方はわからない。

その後吾一や村民全体の努力によって、吉野村は着々と改善されていき、水利灌漑は完成、土地は開墾され、大きな道路が走り、病院も建てられ、マラリアやツツガムシは絶滅、今では模範移民村となっている。吾一は婚約者ナツ子と結婚、夫婦は力を合わせて働いた結果、経済的に豊かな生活、子供に恵まれた幸せな生活を送っている。



一九〇八年のアミ族の蜂起「七脚川事件」を背景に、移民村「吉野村」を舞台にしたこの短編小説「蕃界近き村」は、満洲への移住を推進する「満洲移住協会」の事業目的と合致する内容の作品となっている。地平は一九三九年二月に成立した「大陸開拓文学懇話会」(会

長・岸田國士）に福田清人、伊藤整、高見順、丹羽文雄ら二八人と会員に名を連ねていた。懇話会は、「大陸開拓に関心を持つ文学者達が拓務省と連携、文章報国の実を挙げよう」とする国策文学団体の一つだった。会員はそれぞれの立場で満洲開拓民をテーマにした作品、例えば和田傳『大日向村』、徳永直「先遣隊」、福田清人『日輪兵舎』などを発表していたのである。地平もまた、彼らと行動を共にして、『新満洲』に「蕃界近き村」を発表したことになる。

作品紹介4―「長耳国漂流記」

「長耳国漂流記」（『知性』一九四〇年一〇月〜四一年五月）は、琉球藩民遭難に始まり、台湾出兵を果たし、清国からの賠償を得るまでの長編小説である。地平の台湾取材旅行での最大の目的はここにあった。

一八七一年一月、宮古島の官民六九名が年貢を納めるために那覇に赴いたものの、帰途に台風に遭い台湾南部に流され、牡丹社近くに着した。三名は上陸時に溺死、五四名は原住民に殺され、一二名だけが生き残った。一二名は福州の琉球館に送られ、翌年六月に那覇に帰着した。「牡丹社事件」と称せられる琉球藩民漂流事件である。

日本政府はこの事件を利用して、琉球の日本帰属と台湾進出を同時に目論んだ。七二年に日本政府は福州に領事を駐在させて福建と台湾の事情を窺わせ、陸軍中佐樺山資紀と清国留学中の水野遵を密かに台湾に派遣して現地調査に当たらせた。

台湾進出を計画するなか、日本政府は牡丹社事件の責任を清国政府に求めたが、清国政府は台湾の住民は「化外の民」で、その地域は「教化の及ばないところ」として、牡丹社事件の責任を回避し続けた。

清国のこの返答を根拠にして、日本政府は七四年に西郷従道を台

湾蕃地都督、大隈重信を台湾蕃地事務局長官に任じ、台湾出兵を開始した。そして、原住民の武力抵抗とマリア等の風土病に悩まされながら六月に「蕃地」を占領、原住民を帰順させた。

これによって、清国は、日本が台湾から撤退するにあたり五〇万両を支払うこと、日本の台湾出兵は国民保護の「義挙」と認め遭難遺族に弔慰金一〇万両を支払うこととなった。

地平は素材を収集するにあたって、総督府図書館長山中樵、台北帝大文政学部教授移川子之藏、同土俗学教室宮本延人、台北高等学校教授須藤利一、高雄州恒春郡役所高橋用吉、同高士仏社警部補山野福太郎らの協力を得た。

現地調査も行い、関係者からの証言も得たことで、文献では記されていない新事実も記載されている。高士仏社で頭目と長老から聞き出した琉球漂流民鹹首の真相、樺山資紀と水野遵による現地調査の苦勞、原住民の生活習慣の詳細、原住民の武力抵抗の激しさ、マリア等の風土病による日本軍の被害など、内容豊かな作品である。史実を語る姿勢を貫いている。



『長耳国漂流記』
(河出書房、1941年6月)

作品紹介5―「花多き島」

「花多き島」（『少女画報』一九三九年一月〜）は、台湾の女学校を舞台に、二人の女学生と、彼女たちが慕う教師、その教師の弟、この四人が中心となって物語は展開する。

物語は次のとおり。

佐野うららと李春蓮はP女学校の三年生。親友だったが、全校憧れの白百合先生（葉山ケイ子）の弟、一高生の昌太が冬休みに台湾に遊びに来たとき、二人の心はもつれて絶交した。うららの母親が病死し、独りぼっちになったうららへの同情から春蓮の心はとけ、二人は和解した。

春蓮は東京に戻った昌太から手紙を受け取ったが、その手紙を校庭に落としてしまった。男との文通を禁ずる学校の方針に抵触したとして、春蓮は転校を命じられ、白百合先生は学校を辞職した。

葉山ケイ子は東京に帰り、昌太と同じ家に下宿、そして雑誌社の婦人記者になった。春蓮は修学旅行で東京に行き、ケイ子や昌太と会う。春蓮は昌太から、うらら宛のプレゼントを託される。それは昌太の母の形見のブローチで、昌太がうららに蝶の採集を依頼したことへのお礼だった。だが、春蓮は、二人が親しく交際していると嫉妬して、帰りの船からブローチを箱もろとも海に投げ捨ててしまう。昌太からの手紙でブローチが春蓮に託されたことを知ったうららは、春蓮に激しい憤りを覚え、交際を断つ。春蓮はしきりに謝罪を試みるが、うららは拒み続ける。強い後悔の念に襲われた春蓮はどうとう病に倒れる。

ある時、春蓮の父親がうららを訪ねる。父親の願いでうららは春蓮を見舞う。うららが春蓮の謝罪を受け入れたことで、春蓮は快方に向かう。春蓮の両親は、「命の恩人」うららにいたく感謝する。うららは昌太に、自分の不注意からブローチを紛失したと「偽りの手紙」を出して春蓮の過ちをかばった。

女学校の卒業間近、うららは春蓮の父親から「春蓮のつきそひといふ格で、いつしよにT女専に入つてやつてはいただけないでせうか」と依頼される。旅費、学資や経費の一切は父親が

受け持つとのこと、うららが拒んだら春蓮の東京行きは諦めさせる、というものだった。その直後、雑誌社の社長に見初められてその息子と結婚したケイ子から分厚な封書が届き、T女専への入学を強く勧められる。夫の妹もとても喜ぶ、下宿代は求めない、学資も出せる、という内容だった。両親を亡くし、叔母の家に引き取られ、進学をあきらめていたうららは、春蓮の父親とケイ子の申し出に感謝し、幸福感に包まれる。

三月半ば、うららは春蓮とともに、一万トンのH丸に乗船した。旅費は春蓮の父親が負担し、下宿は白百合先生の嫁ぎ先となり、学資は台北市からの奨学金が得られた。

以上、内容の紹介が長くなったが、台湾の女学生を主人公にした小説は日本人作家ではおそらく中村地平だけのようだ。話は変化に富んでおり、魅了させられる。

この作品は一九三九年秋からほぼ一年にわたって『少女画報』に連載された。だが、残念ながら掲載誌『少女画報』を所蔵する図書館は少なく、そのため「花多き島」は一部しか見ることができない。幸いなことに、「花多き島」は、一九四六年七月に宮崎市の西部図書から『白百合先生』と改題して出版された。さらに翌四七年一月、『白百合先生』は同じく西部図書から再版された。紙型は初版をそのまま使用、ただし印刷者は初版では福岡市の間藤次郎だったが、再版では宮崎市の村川貞二に変更となっている。定価は一五円から五〇円になったのは激しい物価上昇のためだった。そして、最大の相違は、表紙絵が初版では「花に集まる多種多様の蝶」（作画不詳）だったのに、再版では塩月桃甫描く「読書する女学生」になっていることだった。

『少女画報』掲載の初出「花多き島」と比較ができずにあるが、少女小説として優れた作品であるにもかかわらず、戦前に単行本にされなかったのは、内容的に戦時体制に呼応していなかったからで

あろう。



『花多き島』



『白百合先生』初版



再版(表紙・塩月桃南)

作品紹介6―『あをば若葉』

『あをば若葉』(博文館、一九四二年五月)は、台北高校に入学した法科、文科、医科志望の三人の高校生の友情をテーマにした書下ろしの長篇小説。

物語は次のとおり。

主人公根上太一は山陰の松江の出身。中学を卒業後、台北の高等学校(文科)に入学することになった。S氏の台湾を題材にした小説の感化を受けて、台湾への憧れが太一を台北の高等学校に誘ったのだった。

台湾に向かう船上で、太一は二、三歳年上の活発な水野町子(台北市川端町五八番地)、太一と同郷で中年の増田天風(月刊紙『興南新報』の編集局長)とも知り合う。また、同じく台北の高等学校(理科)に入学する島山久夫と知り合う。久夫は二五、六歳、台南の中学校を卒業したものの、東京で左翼運動に関係したことで年齢を重ねていた。後に、台南州知事島山久太郎の長男だということが判明する。

高校に着いたものの、寮は満員ということで、太一と久夫は淡水河近くの指定下宿(川端町三三番地)に下宿することになった。偶然なことに、町子の家の近くである。下宿には太一と同級生の平沼藤吉がいた。藤吉は台北市内(新起町)に家があるのだが、高利貸しの父親を嫌ってここに下宿することになったのだった。

夏休み、久夫は台南の自宅で退屈な日々を送っていると、増田が社屋新築の寄付をせびりに来た。父久太郎が留守だったため、久夫が応対すると、増田は台中の警察で保護検束された少年が久夫の父親を「親父」と呼んでいると言う。女中を孕ませたり、女遊びやいかかわしい処へ出入りしたり、母親への暴力をする父親に対して、久夫は常々許せない思いを抱いてきた。だが、増田の脅迫に反感を覚えた久夫は増田を追いつめ、久夫がその際に「父を尊敬している」と言い放ったことを耳にした久太郎は、増田の脅迫を久夫に任せることにした。案の定、久太郎への誹謗に満ちた『興南新報』八月号が発行された。

太一は久夫を案じて、増田を訪ね、次号からの記事中止を願う。増田は「平沼社長とよく相談してみる」と返答する。社長が藤吉の父親だとわかり、藤吉の協力を得て、九月号に島山記事は一行も書かれなかった。後になって久夫は、増田から新聞記事打ち切りの顛末を聞かされる。

一月、台北高校で記念祭が開催される。記念祭初日、太一と久夫は、あてがわれた教室に「阿呆塔下」と標題を付け、豚三匹を放ち、皆の度肝を抜いた。二日目の夜、校内の大講堂で演劇が公開され、K作『順番』の主役を務めた藤吉の好演技が絶賛を博した。ところが、その翌日、藤吉は気が変になり、S脳病院に入院。いったんは快方に向かったのだが、腎臓病を併発してあっけなく息を引き取った。

太一と久夫は二年に進級。春休みに太一が帰郷すると、下関で町子の母親に呼び止められる。町子は下関の医者に嫁いたが、肺炎の病気で入院中ということだった。太一は町子を見舞うが、また寄ってほしいという町子に「一生会えないかもしれません」と邪険に答えて病室を出る。

その年の夏。日本は中国と衝突。台湾人も軍夫に志願して戦

地に赴いた。そして、久夫の弟俊二も召集されたが、夏休みの終わりごろ、母からの電話で、久夫に俊二の戦死が伝えられた。

さて、物語が始まる船上での場面、これは一九三八年八月発表の『三等船客』（初出不明、『仕事机』筑摩書房、一九四一年三月）をベースにしている。町子は、佐藤哲男「トイフェルと恋と」（『台北高等学校』蕉葉会、一九七〇年一二月）に登場する女性、つまり地平が密かに恋を抱いていた川端町の女性とイメージが重なる。

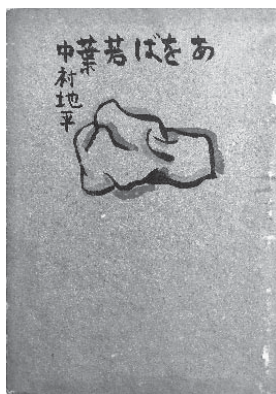
『順番』は菊池寛の作品、高校の第一回記念祭二日目での上演（一九二八年一月一七日）で、文科二年乙類の出し物、会場は鉄道ホテルだった。詳細は主役を演じた渡辺喜三郎が「記念祭演劇―『順番』の叫び声」（『台北高等学校』蕉葉会、一九七〇年一二月）で述べている。

平沼藤吉は地平と交友のあった平田藤吉郎（昭和七年文科甲類卒）がモデルになっている。平田の家は台北市内の新起町に立派な邸宅があり、親は食料品店を営んでおり相当の資産家だった。尋常科から進学した平田は美少年、ナルシズム的な傾向もあり、一風変わった少年だった。常識から外れた行動も多く、その傾向は年々ひどくなり、京都帝大に進んだものの、神経衰弱的な故障で若くして亡くなった。鈴木四四太郎（昭和八年文科乙類卒）「夭折した平田藤吉郎君」（『台北高等学校』蕉葉会、一九七〇年一二月）に詳しい。

記念祭での豚の一件は、この第一回記念祭のことだった。文科一年乙類の教室展示で教室に豚三匹を入れ、文官帽をかぶせて「阿呆塔下に充満する此の臭気」と名付けて総督府官僚を揶揄したことが、総督府をいたく怒らせた。教室は豚の糞尿で悪臭が立ち込め、記念祭が済んで一週間経っても臭いは残り、さすがの三澤糾校長も顔をしかめていた、という。「座談会・三澤糾先生を偲ぶ」（『蕉葉集』蕉葉会有志、一九六六年五月）で、これに関係した長谷川光雄が語っている。このクラスには岸田實（後に国会図書館館長、財団法人台

湾協会理事長）や陳新安（陳建忠副總統の父）などがいた。高校生の暴走を咎めなかったため、これも三澤校長左遷の一つと言われている。

地平は一九四一年一二月に陸軍報道班員としてマレーに派遣されたが、『あをば若葉』は従軍前に書かれたようだ。おそらく、「花多き島」の連載が終了するところから、次の連載小説として執筆に取りかかったと思われる。だが、掲載先が決まらず、そうこうしているうちに太平洋戦争となり、内容が戦意高揚にそぐわないため、雑誌連載の機会を逃したと考えられる。幸いなことに、博文館から書下ろし長編小説として、一九四二年五月に出版された。



『あをば若葉』



『太陽の目』
（収録：『あをば若葉』）

『あをば若葉』は戦後になって、『太陽の目』（宮崎・西部図書、一九四八年一月）に収録された。再録するにあたって、地平は「まへがき」で次のように語っている。

「長篇『あをば若葉』は、数年まへに書きおろし、東京の博文館から上梓したが、戦争ちゆうだつたために、書くことをはばかったところもあり、また削除されたところもあつた。それらをこんど改めて手をいれ、定稿にするつもりで、一本にまとめた。」

地平が書くことを憚った、また検閲で削除された伏字箇所（傍線部分）は、例えば「（台湾は）官吏がやけに威張つてゐるところ」（久夫は）左翼の運動に関係したりしてゐた」（警察に保護

検束された台湾人少年は）台湾独立の運動の一味に加わつてゐた」
「俗称阿呆塔とよばれてゐる総督府の大きなどつしりした建物」等である。

六 地平にとっての台湾

中村地平は一九四四年三月に一家をあげて宮崎に疎開、再び東京に戻ることはなかった。そのため、中央文壇との関係がどうしても希薄にならざるを得ない。戦後は宮崎県内の社会教育、文化活動に積極的に参画、四十七年から五十七年まで宮崎県立図書館の館長を務め、五十七年から宮崎相互銀行取締役、六一年に社長（一六二年）に就任、六三年に五五歳で亡くなった。多忙を極めていた地平だったが、この間に四八年からは結核で長い療養生活も送っている。

そんなわけで、地平の著書は二四冊と数多いとは言えないが、そのうち台湾を題材にした著書（○で表示）はその半数以上の一五冊を占めている。

空襲を避けて宮崎に疎開するまでの東京生活で出版した地平の著書は次の一冊である。だが、それは全て台湾そのもの、あるいは台湾を含む作品集である。

東京在住時代の著書

- 『旅さきにて』（版画荘、一九三七年二月）
- 『熱帯柳の種子』（版画荘、一九三八年三月）
- 『戦死した兄』（竹村書房、一九三九年一月）
- 『蕃界の女』（新潮社、一九四〇年五月）
- 『小さい小説』（河出書房、一九四〇年八月）
- 『陽なた丘の少女』（人文書院、一九四〇年二月）
- 『仕事机』（筑摩書房、一九四一年三月）
- 『長耳国漂流記』（河出書房、一九四一年六月）

- 『台湾小説集』（墨水書房、一九四一年九月）
 - 『あをば若葉』（博文館、一九四二年五月）
 - 『船出の心』（文林堂双魚房、一九四三年一月）
- 宮崎に疎開してから出版した著書は次の二三冊で、そのうち台湾に関する著作は四冊である。

宮崎へ疎開後の著書

- 『マライの人たち』（文林堂双魚房、一九四四年三月）
 - 『愛のある眺め』（大阪・大鑑閣書店、一九四四年六月）
 - 『日向』（小山書店、一九四四年六月）
 - 『河童の遠征』（翼賛出版協会、一九四四年十二月）
 - 『白百合先生』（宮崎・西部図書、一九四六年七月）
 - 『白百合先生』（宮崎・西部図書、一九四七年一〇月再版）
 - 『河童の遠征』（宮崎・菊書房、一九四七年十二月）
 - 『太陽の目』（宮崎・西部図書、一九四八年一月）
 - 『義妹』（小山書店、一九四八年九月）
 - 『陽なた丘の少女』（奈良・養徳社、一九四八年十二月）
 - 『日向民話集』（宮崎・日向文庫刊行会、一九五四年六月）
 - 『卓上の虹』（宮崎・日向日日新聞社、一九五六年六月）
 - 『日向』（角川書店「角川文庫」、一九五七年七月）
 - 『白百合先生』二種（宮崎・西部図書、一九四六年七月／一九四七年一〇月再版）の初出は『少女画報』一九三九年から連載された「花多き島」。
 - 『太陽の目』（宮崎・西部図書、一九四八年一月）は、長篇小説「あをば若葉」の削除箇所等を補填した改定稿、及び『台湾小説集』や『小さい小説』に発表した原住民伝説がそのほとんど。
 - 『陽なた丘の少女』（奈良・養徳社、一九四八年十二月）も既に単行本掲載済みの「陽なた丘の少女」「土龍どんもぼつくり」「南方郵便」
 - 「蕃界の女」「熱帯柳の種子」五編の作品集。
- 残る九冊のうち、陸軍報道班員としてマレーに派遣されての体験

で纏めた『マライの人たち』（文林堂双魚房、一九四四年三月）を除くと、後は宮崎に関する作品、また家族に関する作品となる。戦後は中央文壇との縁も遠ざかり、東京での出版もぐっと少なくなっていた。

結局、地平の作品の舞台は、宮崎疎開以前は「土龍どんもぼつくり」「南方郵便」といった南九州を扱った作品はあるものの、ほとんどが台湾である。以上のことからしても、地平にとって台湾は最も大きな存在だったことになる。中村地平文学を支えてきた原点は台湾だったことになる。台湾が日本統治から解放されたにも関わらず、『白百合先生』二種、『太陽の目』、『陽なた丘の少女』といった台湾に大きく関わる作品を出版するところに、地平の台湾への捨てがたい思いの強さが感じられる。

七 中村地平の不可解な言動

（一） 中学卒業後の一年間

中村地平が台湾の高等学校に入学したのは宮崎中学校を卒業した翌年、一九二六年だった。台湾の高等学校に入学するまでの一年間、地平の動向が気になる。

「中村地平年譜」（『中村地平全集3』、一九七一年七月）には「この年（一九二五年）上級学校に進まず、入試準備のため一時期福岡の予備校に遊学」とある。一般的には中学校を卒業すれば上級学校（高等学校や高等商業学校など）を受験すると考えるのだが、「上級学校に進まず」という表現からは地平に進学の意思がなかったように読み取れる。地平はなぜ上級学校に進まなかったのか。地平は高等学校受験をしなかったのか。受験したとして、不合格だったのか。合格したが入学を辞退したのか。

また、「入試準備のため一時期福岡の予備校に遊学」とあるが、

受験勉強するために予備校に通うことが「遊学」という軽微な表現になっていることにも疑問を覚える。

（二） 台北高校受験の動機

台湾の高等学校をわざわざ受験した理由にも、判然としないものがある。地平は佐藤春夫の台湾を題材にした作品を読んで台湾に憧れた、ということをご所で述べている。また、受験科目に不得意な数学がなかったことも台北高校受験の理由に挙げている。

だが、九州には第五高等学校（一八八七年創立、熊本）、第七高等学校造士館（一九〇一年創立、鹿児島）、佐賀高等学校（一九二〇年創立）、福岡高等学校（一九二二年創立）と、官立の高等学校が四校と比較的多いと言える。長崎には長崎高等商業学校（一九〇五年創立）もある。宮崎県には、大分県とともに高等教育機関はなかったため、進学するには他県にある高等学校を受験するしかない。それにしても、宮崎から門司まで一二時間の列車の移動は我慢するにしても、門司から更にまる二日の船旅をかけて、親類縁者も知人もいない不案内な土地、しかも新設の高等学校にわざわざ入学するだろうか。更に、台北高校に入学しても、この時点では、台湾には進学する大学がない。台北帝大は第一回高等学校卒業生の年に開学したのである。

受験科目に数学がないということならば、佐賀高等学校も同じで、文科受験生には数学が課せられてなかった。地平は「中学生のころ、僕は漱石の『草枕』を愛読し、熊本の高等学校に入りたいと考えた」（『熊本と兄、随筆集『卓上の虹』日向日日新聞社、一九五六年六月）とある。地平は五高志望を捨て、佐賀高等学校も考慮に入らず、新設間もないだけに入学しやすい福岡高等学校（一九二三年創立）でなく、台湾の高等学校を選択したことになる。

それだけ佐藤春夫からの影響が大きかったことになるのだが、佐

藤春夫の作品のどこに地平は魅力を感じたのであろうか。地平はそのことについてはつきりと具体的に述べていない。

「魔鳥」（『中央公論』一九二三年十二月）は原住民伝説に取材した小説ではあるが、場所は台湾であると述べていないものの、軍隊による原住民討伐を批判した内容である。小説「霧社」同様に、台湾に憧れる要素はない。また、「女誠扇綺譚」（『女性』一九二五年五月）は女性誌に発表された作品のため、書店で購入するにしても、図書館で借り出すにしても、恥じらいがあつて躊躇うと思うのだが、地平はどういう手段を講じてこの作品を読むことができたのであろうか。

マラリアにかかることのある、時にコレラ等の伝染病も発生する、生水は飲めない、とにかく衛生状態の悪い台湾に行くことは両親も賛成しかねたことだろう。地平自身も、最後まで台湾行きをためらっていた。「いよいよ出発の日が近づいてくると、遠い、誰も知人のいない南海の島に、独りで旅立つことが、次第に心に臆しはじめてきた。それに、そのごろ、僕はひどい神経衰弱にかかつてゐた」とあり、出発前夜、父親に愚痴を漏らしている。父親は地平を門司港まで見送ってくれたが、「父と一緒に帰りたい気もちも僕には強かつた。しかし、少年の自尊心で、それを口にすることもできなかつた」とあり、いよいよ船が岸壁を離れる時には「観念したやうに、僕は座席へ戻り、畳の上に横になつた」「眼をつむつて、いつまでも僕は父の後姿を追つてゐた」（『南方への船』、随筆・評論集『仕事机』筑摩書房、一九四一年三月）と回想している。

地平が内地の高等学校でなく、あえて台湾の高等学校への進学を決意した経緯は、佐藤春夫の小説への共感からであつたことは間違いないが、未知の世界への憧れが先行していたのではないか。

（三）長篇小説『あをば若葉』の謎

長篇小説『あをば若葉』（博文館、一九四二年五月）が、戦後になって改稿のうへ『太陽の目』（宮崎・西部図書、一九四八年一月）に定稿として再録されたことは既に述べたとおりである。

しかし、『太陽の目』に再録する際、地平は小説の最後部分、つまり日本と中国の衝突、日本人の応召、台湾人の軍夫志願に関わる話を全面的に省いた。重要な事項であるにも関わらず、この件に関する説明は『太陽の目』の「まへがき」に全く書かれてない。確かにこの最後部分は、台北高校高等科時代の学校生活を描いた作品としては座りが悪い。違和感を覚える。しかも、雑役に従事するために日本軍に加わる台湾人軍夫の採用は一九三七年からであつて、一九二八年前後の台湾を舞台にしたそれまでの話からいきなり一〇年先も飛んでいるのは歴史事実と大きく異なっている。

『あをば若葉』を出版するにあたって、地平はなぜ、こんな小細工をしたのだらうか。もしかすると、検閲で削除された箇所があつたと同様に、『あをば若葉』を出版するにあたってこれを継ぎ足すことを受け入れざるを得なかつたのかも知れない。

おわりに

地平は生前に多くの原稿や書信を庭先で焼却したと、玲子夫人が『地平という雲』（NHK、二〇〇二年六月七日放映）で証言している。それらが処分を免れていたならば、いくつかの事実が判明できるのだが、残念である。

だが、小松孝英監督によるドキュメンタリー映画「中村地平」の完成で、地平が宮崎県内のみならず、日本全国そして台湾でも広く知られるようになった。小松孝英監修『中村地平短編小説集』（黒潮文庫、二〇二四年六月）が出版され、あらためて地平作品が読め

ることになった。その結果、中村地平が再び脚光を浴びることとなった。

これを機会に、中村地平研究が深化していくことで、幾点かの謎が解明されることを願い、地平文学への理解がより一層深まることを期待したい。

鼎談 「作家・中村地平」

宮崎大学名誉教授

岡林 稔

一般財団法人台湾協会評議員

河原 功

美術家兼映画監督

小松 孝英

※鼎談者前の座卓に設置したICレコーダーで記録した音声を時系列で文字を起こし、

質問者を除く鼎談者三名それぞれに内容を確認していただいた原稿である。

【司会者】

定刻が参りましたので、今年度の文化講座、午後の部の、鼎談「作家・中村地平」を始めさせていただきます。

鼎談ということで、三人の方に来ていただいております。午前中は「中村地平と台湾」というタイトルで講演していただきましたが、その折りの講師・河原先生をはじめ、前に座ってらっしゃるお三方です。

では、河原先生も含め、もう一度、三人のプロフィールをご紹介しますいただきます。

皆さんから見て向かって一番右手が、河原功先生です。

先生は東京都のご出身で、成蹊大学大学院修士課程を修了後、成蹊高等学校の教諭として教鞭をとっておられました。その傍ら、台湾文学について東京大学や成蹊大学、日本大学で非常勤講師を務めて来られました。現在



は一般財団法人台湾協会評議員を務められております。

一九六九年、初めて台湾へ渡られたときに台湾文学の存在をお知りになりました。それ以来、未開拓だった台湾文学研究に取り組んでおられます。代表的な著書であります『台湾新文学運動の展開』は、同名で修士論文でもあるわけですが、当時「世界で最初の台湾文学史」でありますとか、「台湾文学研究のパイオニア」と言われるほど高く評価されたものになっております。

それでは続きまして、真ん中になります。岡林稔先生です。

岡林先生は、高知県のご出身です。土佐高校卒業後、早稲田大学第一文学部英文科へ進学されました。そのまま大学院に進まれまして、修了後ここ宮崎の宮崎大学へ赴任されました。

その頃から中村地平に関する研究を進められております。教授を務められて、退官された後も地平に関する研究を継続されておりますが、中村地平も関わった文芸同人誌、地元の『龍舌蘭』の発行にも努めながら、文芸評論家としても活動されております。宮崎大学の名誉教授でもあります。二〇〇二年に出版された『《南方文学》その光と影——中村地平試論』（鉾脈社）では、その翌年に、第一三回宮日出版文化賞を受賞されました。一昨年には宮崎県文化賞、文化功労も受賞されております。

それでは、お三方目のご紹介です。小松孝英さんです。小松さんは宮崎県延岡市出身のアーティストです。九州デザイナー学院を卒業され、その後、様々な文化活動をされておられますが、ロンドンや香港、スイス、台湾など世界一〇カ国で個展を開催されたり、アートフェアに出展されたりしておられます。企業とのコラボレーション作品も作っておられます。その作品は国連関係施設や海外企業にも、多数いま展示されているところです。

近年では、皆さんご存じのとおり、塩月桃甫や中村地平のドキュメンタリー映画、これらの制作立案、脚本・監督も務められて、美術家以外にも映画監督という肩書きがついておられます。美術家との二刀流ということで多忙をきわめておられますが、今春のドキュメンタリー映画「中村地平」が宮崎県民に作家・中村地平という人はどんな人なのか、ということを再認識させてくれる火付け役になったといっても過言ではないと思います。延岡出身ということ、延岡市の観光大使も務めていらっしゃいます。

以上、この御三方に「作家・中村地平」についてお話をしていたかどうかになります。それでは、岡林先生よろしいでしょうか。引続き進行をお願いします。

【岡林氏】こんにちは。進行役を務めます岡林でございます。

いま紹介があったように、約二〇年前に書いた評伝が、

小松監督の映画で、このようにスポットライトを浴びることになったので、忘れられていた地平の本が一気にスポットライトを浴びると同時に、いろんな方が地平に関心を持つようなきっかけを作ってくれた、私の息子のような、いや中村地平が一九〇八年生まれ、私が一九四二年生まれ、そして小松くんが一九七九年生まれ、そういうふうになりたい四〇年ぐらいずつの世代間隔で来ております。そんな中で今日午前中の講師の河原先生は、特に台湾文学に詳しいオーソリティーでありますので、その先生を加えて、そしてこの三人で話を進めていく進行なんですけども、まず最初にこのタイトルが「作家・中村地平」でありますので、いちおう私の方で準備しました、中村地平の文学作品年譜を中心にしたハンドアウトに沿った進行にさせていただきますことにします。

実はこれは高校生を対象にした講演会で、中村地平の「戦争と文学」という話で使ったときのものであり、それを少し手直ししました。

こんなふうにしてたくさんの方が、中村地平に関心を持つてくださいましたけども、実はこの二〇年ほど必ずしもそうではなかったのです。例えば僕がこの評伝を書くに至った背景にもなってますが、毎年、中村地平のことを偲ぶ地平忌が大体彼の命日の二月二六日前後の土曜日に行われていたんです。皆様は市民の森に文学碑ができたのをこ

存じでしょうか。あそこにできたところから、毎年恒例の地平忌が二月の土曜日に行われておりまして、それに僕もずっと参加しておりました。それが一つの大きな評伝を書くきっかけにもなったんです。さらに宮崎子ども文庫連絡会というのがございまして、この人たちが私の本が出た少し後に、郷土の作家中村地平の童話に近い、この民話を改めて子どもたちに読んで欲しいと、『河童の遠征』という宮崎の民話を集めた本を復刻したんですね。鉾脈社から出ております。この復刻版を作るに至ったこの会の方々の動きが出てきて少し変わってまいりましたね。地平忌には玲子夫人とか、弓子さん、槇子さんお二人のお嬢さんも出てこられて、そしてその周りに中村地平の旧知の方々たくさん見えたんですけれども、その白板にピンアップしてありますように、実は二〇〇八年、ちようど生誕一〇〇年に、宮崎で日本社会文学会の全国大会がございまして、その時に地方の問題、地域の文学をテーマにしながら、片方で併行しまして、ここ宮崎県立図書館を舞台にして、生誕一〇〇年祭というものも、行事として行われたりいたしました。

こんなふうに中村地平を顕彰する一つの手がかりになるような行事もあったんですけれども、この当時私が中村地平についての講演はボチボチと頼まれることがあったものの、とにかく中村地平という作家のことを知らない方もい

たものですから、いつも当時の講演のタイトルは「北の太宰、南の地平」という、太宰と抱き合わせでさせてもらってたんですね。

そして、先ほどの地平忌のことお話しましたけど、そこには実は宮崎の画家で、中国との日中戦争に輜重兵(しちようへい)として、要するに馬の世話をしたりする兵隊として派遣された画家の坂本正直(まさなお)さんがいつも出てくださっております。僕に何度も何度も評伝をまとめろというアドバイスをしてくださった方なんですけど、その方の遺作展が今ちようど隣の宮崎県立美術館で開催されていますが、これも奇縁ですね。坂本氏の長女・所薫子さんとお話をして、「とても不思議な縁を感じます。父があれほど崇拝していた中村地平の、鼎談そして講演があるときに隣の美術館でこのような遺作展ができることを幸せに思います」とおっしゃっております。

そんな中で、この鼎談を始め、改めて宮崎で中村地平という作家を少しでも、本質にまで至らなくても、皆さんが他県の方にいろいろ聞かれたときに、中村地平はこんな人だというようなことをお話できるように話が進めばいいかと思っています。

おわかりのように、県立図書館が文化講座の一環としてこのテーマの講座を舉行するようになったのは、小松監督のドキュメンタリー映画「中村地平」によるものがとても

大きいわけでありす。最初に塩月桃甫の映画を作ったことから始まったというふうに聞いております。塩月桃甫から中村地平に至って映画を作ろうという気持ちになった経緯を、小松監督の方からお話をいただければと思います。また宮崎県だけではなくて東京、大阪、さらに台湾で上映会が行われてます。その全ての場所に小松監督は行ってお話をしてるわけで、各地での中村地平の映画、あるいは中村地平という作家に対する反響で特に印象に残ったもの等がありましたら、それも紹介していただきたいと思います。まず最初に出会いのところから。

【小松氏】私が本業でアーティストをしてるので、この一〇年ぐらい台湾、香港、シンガポールに自分の絵の展覧会だったり、自分が出品する国際アートフェアのために رفتりして、台湾は本当最初ただ絵を売りに行くだけの場所でした。

僕は湾生（台湾生まれの人）の子でも孫でもないし、台湾とは縁もゆかりもなかったんですけど、その中で二〇一七年ぐらいに日本統治時代の展覧会が台北で開かれていまして、最初に台湾に西洋美術を入れた人、そして台湾美術展覧会を作った人が宮崎県出身だということを耳にしました。それから台湾でいろんなことを見たり調べたりすると、塩月桃甫という宮崎県出身の人があつちでは教科書に載るぐらい有名な人だった。でも日本ではほとんどの人が知ら

ない。そしてそれに続く教え子の中村地平その人も、台湾文学ですね、戦前の日本統治時代の台湾の小説を残した人として、塩月桃甫ほどではないですけど、研究者がいたりして知られていたと。自分と同じ宮崎県出身の人が一〇〇年前に台湾へ渡って、そこにはすごく頑張ってた足跡がありました。

僕ら世代はほとんど知りませんでしたので、これはなんとか、もう一回記録に残さなきゃいけないなと思い始め、忙しくてあんまり最初のうちは手がつけられなかったんですけど、調べていくと、川南の骨董屋さんで、床に置かれてる台湾原住民タイヤル族の少女の絵をたまたま見つけたんです。戦前・戦中ぐらいの絵なのに、台湾原住民のことを描いた人がこの宮崎県に居たとか、いろんなことがわかってきた。戦前の同化政策とか皇民化政策の中で、桃甫が現地の台湾原住民の文化とか風土とかに魅せられて守ろうとしていた人だったことや、さらに台湾文学で中村地平も、当時の原住民のことだったり、戦地の人たちの文化を伝えてたりした人だったということも途中からわかって、いま多様性の時代として当時同じ宮崎出身の人がそこまでやっていったことを、何か形に残そうということで、ドキュメンタリー映画を作りました。

【岡林氏】各地での反応に何か感想がございましたら。

【小松氏】先々月に台湾の桃園映画祭に招待出品させてい

ただいて、ドキュメンタリー映画の「塩月桃甫」と「中村地平」の両方を上映させていただいて、台湾では今、日本統治時代ブームって言っているのか、八〇年代より前までは戒厳令時代で、あまり日本統治時代のことを探ったり良く言ったりすることは駄目な時代があったんですけど、いまの台湾の若者たちは結構日本統治時代のことを調べていて、そういう人たちからの熱い質問だったり、興味ある人たちからの反応があったり、台湾はとにかく観る人が若い。日本で上映会すると年配者が多くて、若い人はあまり興味持ってもらえないとを感じる。あと東京でも、河原先生と一緒に日本大学とか、台湾文化センターとかで上映をさせていたでいて、こちらでは湾生（ワンセイ）と言われるその台湾生まれの人達の子や孫の人たちや台湾好きの人に来ていただいたり。宮崎県から台湾に戦前はたくさんの方が行っていて、たぶん皆さんの中でも親族で台湾生まれの人がいると思うんですけど、その辺のロマンを感じられる人たちにとってはすごく、いいものを届けられたなという反応でした。反省点はまだまだ若い人たちに興味を持ってもらえてない。日本と台湾の歴史をいま勉強しないですから、僕らも習っていないし、事実上方法がないので、そういう反応はありました。

【岡林氏】はい。宮崎県での観客、あるいは関心を持ってくれる世代がやはりシニア層になってたっていうことは、

僕も一緒に回ってて感じたところでもあります。

それでは、作家・中村地平についての本論に入っていきたいと思います。お手元のハンドアウトに従って、少し最初の方から、特に午前中は河原先生にも詳しくお話をいただきましたけれども、まず最初のところ、旧制宮崎中学校から旧制台北高等学校に進学した当時のことで、そこに書いてますけど、中村地平が、神経衰弱と当時呼ばれていた病気になるってちよつと弱い存在、弱い部分を持った弱者であつたということ、その弱者というもののからの文学者への道、というものの可能性をお話したところでした。エピソードとしては、当時一八歳になって宮崎から日豊線で門司港まで夜行で行くときに、その当時、やがて相互銀行となる会社の社長である、お父様に付いていってもらっていったんですよ、一八歳の男の子が。そして



門司港でキールン（基隆）に向けて出る船の、ランチ（原動機付きの小型船）が出るときに、電報の頼信紙に「ブジツイタ アンシンセヨ」とまで書いて、それを地平に渡して、向こうに着いたらこれを郵便局で出すんだよとか言ってるね。そしてまた、もし体の具合が悪くなったらいつでもいいから帰っておいで、というような、とても過保護的な状況だったんですけども、そんな中村地平が台北高等学校に進学いたします。

午前中は、当時の試験は福岡であったことを河原先生から伺いましたけども、数学の試験がなかったことなどを含めて、台北高等学校に入学した当時の文学活動、同人雑誌『足跡』で文芸活動したことを知られてると思うんですけども、それ以外にいろんな演劇活動も率先してやってたことなど、エピソード等含めて、河原先生の方からお話いただきますでしょうか。

【河原氏】先ほどもお話ししましたが、九州には旧制の高等学校が四校ありまして、最初にできたのが熊本第五高等学校、その次が鹿児島第七高等学校になります。地平が台北高校に行く、比較的近い頃にできたのが佐賀高等学校、佐賀は一九二〇年の創立です。そして、福岡高等学校が一九二二年。高等学校が四県、七県のうち四校が九州にありました。さらに長崎には、高等学校ではないんですけど、長崎高等商業学校というのがありました。結局、高等

教育機関としてないのが、大分と宮崎という、そういう状況でした。新設の高等学校っていうのは入りやすいですね。ですから、地平は福岡でもよかった訳です。そして、なおかつ、文科の受験科目に数学がなかったという点では、佐賀高等学校が彼にとっては非常に有利だった。わざわざ台湾までいかなくてもですね。そういう中で、数学がなかったことは、台北高等学校を受験する一つの要因ではあったけれども、それだけじゃないということになります。

それで、やっぱり佐藤春夫の作品に魅せられてということですが、中学時代の地平は、漱石の作品に憧れて、第五高等学校受験を考えていたんです。したがって、どういう経緯で台北高等学校に進学を決めたのかというのは、検証する余地がまだあると思っています。

ただ、岡林先生がおっしゃったように、彼は、いよいよ台湾の高等学校に行くにあたって、非常な戸惑いを覚えていたということは事実で、それはいろんなところで書いてるので間違いない。それでも台湾を選んだという理由が、ちよつとやっぱり見えてこない部分がある。

同期に入学した鹿野忠雄のように、台湾には蝶がたくさんいるから、それを目当てに行くと決めた明確な理由とはちよつと違いがあるような気がします。ただ入学してからは、彼は台湾の高等学校に入ったことを非常に喜んでいましたね。精神的に開放感を得たんだろうと思います。最初の

ところですね。

【岡林氏】お芝居、演劇活動の方は？

【河原氏】高校一年のときに、「山の神々」という脚本を書いて上演しましたし、それから二年のときは、記念祭で脚本部の責任者になります。第一回記念祭のときに、「順番」という、菊地寛の書いた作品の上演があります。これに出てくる主人公役は、『あをば若葉』という作品の中では平沼が務めます。彼は演劇に夢中になって、結局発狂してしまう。そして入院中に腎臓病で他界するのですが、同じような話は実際にあって、地平と同じ級友か一年下かと思いますが、平田藤吉郎という学生がいて、彼も演劇の方で活躍はしたけれども、結局そのあと京都帝大に入学したんですが、在学中に気が変になって亡くなってしまふ。その彼の話も作品の中に織り込まれているという感じです。とにかく演劇は台湾の台北高等学校の最大の催し物でしたので、一般の人たちからも絶賛を受けて期待もされていたということでもあります。

【岡林氏】意外と神経衰弱であったというようなイメージと違う形で、実際に入学した後の台北高等学校での、彼の文学活動、あるいは青年劇としてのいろんなお芝居に積極的に関わっていた姿から、段々と作家の片鱗が見えてきたような感じでもあります。

次の項目に進みたいと思います。ハンドアウトの二のと

ころで、「小説家への進路」と書いております。ちょうど中村地平と同年生まれであった、宮崎大学教授でもあり、『龍舌蘭』同人でもあった長嶺宏先生は第五高等学校から、飛び級で東京帝国大学国文科に入学したということでありまふ。それに対して、彼（地平）は数年遅れて東京帝大の美術史学科に入学するわけです。

これはちょうど太宰治（津島修治）と同じ入学年度であつて、太宰治は、卒業はしなかったけど、仏文科に入学してるわけです。仏文科を志望しておりながら、入学試験場では、試験官に向かって「僕はフランス語ができないんだけど」ってなことを言う男がいたことを、「失踪」という小説の中で中村地平が太宰について書いている。脚色もあるかもわかりませんが、そういう形で、いよいよそこに小説家への進路として、東京帝大に入つて井伏鱒二門下での、太宰らとともに彼の作家活動が始まり、いろんな文芸活動をしていくわけです。

このあたりから本がたくさん出版されます。実は最近になって、私自身も読んだことも、手に取ったこともないような中村地平の書いた作品を含む雑誌の類が、小松君により発見されています。先日は濱田隼雄の『南方移民村』とか、地平の『蕃界の女』の初版本を見つけたとか言つて、僕に報告してくれるんです。また、昭和一六年に出た『小学三年生』（小学館）という雑誌、その中に中村地平が書

いた、なんと童話「とんぼとあり」がある。そんな文献まで見つけてくれるんです。そこで小松君は画家ではありませんけれど、みずからの絵があちこちからコレクターに選ばれていく身分でありながらでしょうか。たくさん初版本、地平に関する初版本とかいろんなものを集めるけど、どんなふうな関心から、どんなふうにして集められましたか。

【小松氏】いま県立図書館で開催している中村地平展にたくさん僕のコレクションを貸していますので、帰りに観てください。宮崎には文学館がないので、牧水のはありますけど、中村地平とか近代史ミュージアム的なものもいずれつくりたいなということで、塩月桃甫、瑛九、中村地平の資料とか、作品を集めていたんです。だんだんその地平の同級生の濱田隼雄とか、鹿野忠雄の本とか、同時代の日本統治時代の台湾に関する本のパッケージ装幀のデザインや、絵が好きで買ってたんですけど。だんだん先生たちのコレクションを見ていると、燃えてきてコレクターになっしまいました。あとさっきの話なんですけど、地平が記念祭で劇をしたりした台北高等学校は今でも校舎とその講堂が残っていて、台湾師範大学として使われています。ぜひ皆さん台湾に行つて、そういうところを巡って欲しいですね。

【岡林氏】ありがとうございます。
今お話がありましたけども、高等学校から作家を志望し

た四人の友人の一人として濱田隼雄の話が出ました。宮崎と違うんですけども、同じように地方の仙台から台北高等学校に入り、文学活動をして、同じように作品を書いていた。同じような環境であった濱田隼雄について、特に『南方移民村』の初版本等のことにつきまして、一言お願いいたします。

【河原氏】濱田隼雄は、台北高等学校では、クラブ活動としては絵画部に、地平は文芸部に属していました、二人とも非常に仲が良い間柄で、濱田隼雄は台湾文壇では、代表的な作家として大成していきました。『南方移民村』という本、先ほど画像でも出しましたが、あれは代表作の一つであります。

仙台出身で、彼の場合は、どちらかというと社会運動家に近い感じで、台北高校を卒業した後、東北帝大に入つて、その段階で社会運動に大きく関わって、結局、日本国内では煩わしいと思つたんでしよう、台湾に渡つて、台湾で学校の教師を務めながら作家活動をしていきました。

雑誌『足跡』は、濱田隼雄、そして、のちに都新聞社に入社した土方正己、桃甫の息子である塩月昶（たけし）、それと中村地平、その四人が言わば中心になって創刊したんですが、三号まで出したところで、次の号は濱田隼雄が担当するところでしたが、濱田はその辺りで『足跡』を編集するについては、ちよつと気が乗らなくなつて、結局『足

跡』は三号で終わってしまいました。

仙台に仙台文学館がありますが、そこに濱田隼雄の様々な資料が寄贈されておりまして、『足跡』はなかなか見ることのできない雑誌ですが、国内ですと仙台文学館にあります。

濱田隼雄には原住民を書いた小説がほとんどありません。それから、台湾人もほとんど書かないんですね。一篇ぐらいしかなくて、大半が台湾にいる日本人を書いていきます。濱田隼雄の作品、私は非常に好きなものが多いんですけれども、「公園の図」という短編なんかは台湾の町並みの様子がよく描かれていて、非常に印象に残るものがあります。濱田隼雄については、以上です。

【岡林氏】何かコメントがあれば、どうぞ小松さん。

【小松氏】仙台文学館か、河原先生の書齋にしかその『足跡』って雑誌は現存していません。

【岡林氏】今日その特別室で、「中村地平の足跡」というタイトルでの資料展、あそこその大半のものは小松さんが集めたものでありますし、特に今まで僕が書いた本の中で触れることがなかった、書簡ですかね。特に奥様、玲子さんに宛てた手紙とか、中村地平の、文学者である前に人間である側面が読み取れます。意図して書かれてない、見せることを意図して書かれてない私信がありますので、まだご覧になってない方はぜひ見て欲しいと思います。

そんなふうにして台北高等学校を卒業した人たちが各地、本土等でもずいぶん活躍していくことになります。もう一回ハンドアウトに戻りまして、「小説家への進路」の中で一九三二年に「熱帯柳の種子」を発表しました。これが文壇デビュー作になりますけれども、この作品につきましては、とにかく当時は自分が内地から来た、日本人であり、いわゆる宗主国の人間であるという、一種の植民者優位の政治体制の中で、ともすれば自分もそういった立場に立ってしまう青年・地平の、虚無的な心の痛みを書いた作品でもありました。さらにそれから進展していきまして、午前中のお話の中でも河原先生の方から熱く語られました。一九三九年の「霧の蕃社」、これは一九三〇年の霧社事件に取材し、いわゆる原住民の生存権、弱者側に立つ中村地平の、当時の原住民の側に立った点で初めて書かれた霧社事件の作品であります。ただ現実には霧社事件を鎮圧するために台湾総督府が、あるいは警察等が取った態度、例えば反乱を起こした民族に対して、日本側に与みしている原住民たちを使ったり、また軍隊が近代兵器によって鎮圧するわけですからけれども、それと同時に、この反乱を起こした人たちを件の別部族が襲う、いわゆる第二霧社事件についての言及はないが、地平が最初に作品化したという説明がありました。

さて、先ほどから出てるように、中村地平、あるいは塩

月桃甫には、原住民族への関心というものがあつたからこそ、その弱者である、彼等の側に立った姿勢で書くつていうことができた、お話になったかと思ひます。ここで今私たちが、例えば台湾各地を旅行しますと、特に南の方に行きますと原住民族の村があつたりして、特に南の方に使つたりして古代からの舞踊とかを見せるわけです。何か、それを見ると少数民族を観光の目玉に使つてゐるような、そういう側面もあつて嫌な氣もします。一九三〇年に霧社事件、原住民たちの反乱事件の最たるものがあつたわけですから。原住民に対する関心というものを、ここで改めて考えてみたいと思ひます。

今さつきもありましたけれども、原住民の認識に関して小松さんが映画で最初に取り上げられた塩月桃甫の絵の中に、「母の像」という霧社事件で鎮圧された原住民族の悲哀を描いた、母親が子供をだっこして、その遠景には鎮圧軍から火をつけられた部落が燃えてゐる姿とありますけれども、その塩月の絵は、原住民の少女のほかにも原画が、県立美術館にはたくさんあります。画家である小松さんから改めて原住民あるいは「母の像」とか、そして塩月桃甫及び中村地平のことを踏まえた原住民への、彼ら両作家の興味を持ったところをお話いただければと思ひます。

【小松氏】当時、ゴーギャンみたいに南の島に行つて原住民を描くつていうところを、塩月桃甫は重ねて大正一〇年

に台湾に渡つたんですけれど、塩月桃甫の日記を見ると、すぐに原住民探索の旅にタロコの方に行つたり南の方に行つたりしてゐて、彼のアトリエはもう原住民の模様の布だつたり、置物つていうんですかね、土偶みたいな、ああいう民族的なもので溢れてゐたつていう文献を見ました。原住民の文化、模様だつたり色とか暮らしにすっかり魅せられて、最初の頃の台湾原住民の彼の作品は、火祭りだつたりいろいろ楽しそうなんです。日中戦争が始まつたあたりから、もちろん霧社

事件の後に発表した作品も、原住民の顔はすごく恐怖とか怒りとかそういうものが感じ取れる表情の絵だつたんですけれど、戦時体制になつてから彼が描いた原住民の絵は、だんだん瞳がなくなつていたり、暗くなつていきます。戦後、宮崎に引き揚げてから回想して描いたものは、またちよつと明るくなつて



きたりとか、何か年代別に彼の作品を見てるだけでその時代背景が見えてくるというか、それを原住民に結構描いて出していた画家だったなっていうのは、口では言えない時代だけど作品にはやっぱり、すごく言いたいことが読み取れるというか、そこは地平も一緒なんですけど、そういうのは感じました。

【岡林氏】その台湾の原住民だけじゃなくて、ごく一般の漢人としての台湾の人々との関係も少しお話しておかないといけないと思います。河原先生にお聞きしたいんですけども、塩月桃甫の絵そのものと同時に、台湾の美術界をリードした非常に大きな功績があることを御本でも読みましたけども、改めて今、塩月桃甫の絵画そのものではなくて、台湾の美術界をリードしていったお話を少し挟んでいただけますでしょうか。

【河原氏】台湾では台湾美術展覧会、いわゆる台展とか、あるいは府展つまり台湾総督府美術展覧会とか、そういうのがあります、かなり台湾の美術界は盛り上がっていたと私は思います。

それもやっぱり塩月桃甫という西洋画でリードされた方がいるのと、石川欽一郎という画家がいて、この人もかなり台湾では活躍をされました。それから、学校の教師として画家がたくさんいます。ですから、台湾での美術界は、日本国、内地と同じように盛んだった、というふうに

思います。

とりわけ桃甫は人気がありまして、いろんな雑誌や単行本の装幀も手がけているんですね。画題が幅広く、先ほど『翔風』にあつたように、創刊号と第二号は著しく異なる表紙になるんです。でも彼がいちばん好きだったのは、やっぱり原住民を描くことですね。それを描いた作品がたくさんあります。

それから、塩月桃甫が割に話題にのぼりますけど、塩月桃甫展は何年前でしょうか。こちらで岡林先生たちに初めてお会いした二〇〇一年ですか、県立美術館で大きな展示会がありました、そのとき私から塩月桃甫が装幀した本を展示用にお貸ししました。

台湾の画家で評価されてるのはもう一人いまして、立石鐵臣（てつおみ）です。鐵臣（てっしん）とも言いますけれども、彼の展覧会が数年前に、東京の府中美術館で開催され、展示開催中に図録が完売するという、美術館としては有り得ないような人気を博したことがあります。鐵臣については、銀座の画廊でも展示が行われたんですが、府中美術館での展覧会は素晴らしかったです。

さらに宮田弥太郎という人がいます。台湾で出ている雑誌で『台湾芸術』があるんですが、これの表紙をほとんど手がけた、この人も人気です。『台湾芸術』は六三冊発行されたんですけども、この間三八冊ぐらいですね、台湾

のオークションに出まして、揃ってはないけど、八萬元。台湾元とのレートが一對五ですから、四〇万円ですね。それがスタートラインで、私持っていないところが若干ありましたので、どうしても欲しくて、二〇万円まではお願いするように仲介する人には伝えたんですが、落ちたのはなんと五〇萬元。二五〇万円、ちよっと手が出ないです。それだけ今、台湾での、日本統治時代の絵の評価っていうのは高くて…。

【小松氏】やっぱり台湾、日本が引き揚げたあと国民党が入ってきてから、日本統治時代のはほとんど焼却処分だったので、雑誌一つ、作品、絵もそうですけど、ほとんど残っていない。それを日本だったら偶（たま）に出てくるということで台湾の人たちが日本で探していたり、いま台湾の人たちが探しているものは河原先生の家でいっぱい見ました。

【河原氏】取り掛かったのが早いだけの話なんですけど。

【小松氏】そうですね、戒厳令時代からね、台湾に出入りして、（七〇年代から）それと二〇〇一年だから二三年前に宮崎県立美術館が「塩月桃甫展」を一度大きくやってるんですけど、そのとき僕は宮崎に居なくて学生だったので知らなかったんです。その時に塩月桃甫が表紙を描いている台湾時代の本や雑誌を貸し出されている。

なぜそういう時代から先生たちは、台湾文学だったり中

村地平だったりの研究をされていたのかという感じですよ。

【岡林氏】いま古い本の話が出ましたけども、単なるコレクターじゃなくて、これがやはり将来いろんなことが議論されるときに、ただ、印象だけじゃなくてきちっと裏付けされた論拠になりますので、大変なお金がかかるようでありますけど。是非、これ、続けていたきたいと思います。

今日午前中の河原先生のお話は、すべて自分の手元の資料に基づいたことばかりでしたからね、特にそんな印象が強いわけであります。台湾と日本の関係っていう中で、何年前か前、直行便が台北と宮崎の間にあったときに、何度か若者たちも連れていったことがあり、台湾が植民地であったことを知らない子はさすがにいなかったんですけども、かつてアメリカと真珠湾の事件から戦争が起きたということとは知らない若者も多いと聞きます。台湾と朝鮮半島の対日感情の違いというものをいろんな所で聞くわけですけども、とにかく一九四五年、日本は敗戦して、いわゆる「光復」という、光がまた元へ戻るという形で台湾の人々は、これでやっと日本の統治、日本の支配から逃れて自分たちの母国に復帰するんだということで、そしてキールン港に入ってくる国民党の兵士たちを迎えたわけですね。

ところが、共産党の毛沢東との戦いの中で、すっかりやられてしまった国民党の兵士たちは中国大陸からやってきた。ちゃんとした軍服ではなく蓑笠に草履姿で鍋釜を提げ

て入ってきたというふうにも言われております。

それまでは大変厳しい日本の統治下だったのが、そこに自分たちの母国の軍たちがやってきて、再び自分たちの国に復帰できるんだという期待を裏切るようなエピソードが残っている。笑い話にもならないんだけど、中国大陸の中でのインフラが整っていない所から、台湾にやってきた国民党の兵士たちは、水道の普及ぶりに驚いたわけですね。とにかく蛇口というものをひねったら水がジャージャー出てくる。金物屋に行つて兵士たちはその蛇口の部分を買つてきて、それをいきなり壁にぶすつと差し込んで、ひねっても水が出てこないとか。当時まだ残つていらした日本人のお医者さんの話なんですが、往診するときに自転車を使ったそうですが、いろんな医療器具が入った鞆を持つて、荷台に乗つけて往診していると、大金を抱えて運搬していると間違えられて、何度か襲われたことがあったとか。そして、新しい政府、国民党政府のもろもろの圧政が「二・二八事件」というようなものへ及んでいく。いわゆる日本人の残した歴史の功罪についてはまた後の方で触れたいと思います。

それでは、次の話を進めるために、もう一度ハンドアウトをご覧いただきたいと思います。

今、「小説家への進路」の中で、一九三九年の作品「霧の蕃社」、いわゆる一九三〇年の霧社事件に関する原住民

のお話をしたわけでありませうけれども、一九三七年に「土竜どももぼっくり」とか、三八年「南方郵便」という作品を中村地平が発表いたします。これは芥川賞候補になつても、選から漏れました。午前中では河原先生への質問で、なぜこの二つの作品が芥川賞を受賞できなかったんだという質問があったりして、関心の深いところであります。さてこの中村地平が「土竜どももぼっくり」とか、「南方郵便」というような作品を手がけるようになった背景について少しお話して次の座談会の方に進めていきたいと思います。

実は、太宰治とはとても仲が良く、井伏鱒二のお家でしょっちゅう会つて、中村地平はお酒が飲めなかったようですけれども、一緒にいろいろ飲み食いしたり将棋を指したりしていた仲の良かった二人に、大きな亀裂が入る事件が起こるんですね。それは、太宰が鎌倉で自殺をしようとして縊死未遂に終わってしまうことがあったんですが、そして太宰治の自宅には井伏鱒二をはじめ檀一雄とか中村地平とか皆が集まって、「まさか」と、最悪のことを心配しながら太宰治の帰りを待つてゐるという、そのことを小説にした地平の「失踪」という作品があります。この「失踪」は言わば、当時はさらにあったモデル小説なんです。太宰のことを、その「失踪」という小説に書くことによつて、二人の間に大きな亀裂が入つて、やがてそのあと太宰治が中村地平に手紙を出す。それは残つてないんですけど、大

変な怒りを込めた、あるいは憤懣を發したような手紙であつたようです。

そのあと、中村地平は「太宰治へ」という作品を、『日本浪曼派』に發表するんですね。そして、しばらくして今度は太宰治が「喝采」という作品で、中村地平のことを、実は大変戯画化して茶化して馬鹿にして書く。というようにところから、だんだん太宰治との仲が悪くなつてきて離反していくんですが、その進行の背景と中村地平文学の変容の方向性が少し重なっていく。実はそれまでに、中村地平は都会の心理主義小説、男女のどうしようもない悪性がつれた、男女の愛の悲劇を書いて、人間の男女の心理の断末魔のような作品を書いているんですね。「悪夢」とか「陽なた丘の少女」というような、これは午前中の河原先生のお話もありましたけども、同棲しておりました真杉静枝という女性との関係が裏にあつて、彼自身は悩んでいた。真杉静枝っていうのは、実際に七歳も年上で、男性関係の、評判の良くない女流作家でもあり、世間では石川達三の「花の浮草」だとか、現代では林真理子が「女文士」というような作品でモデル化して書いております。中村地平自身は、例えば「悪夢」という小説では、都会の男女の悪性、どうしようもない男女の仲を書いた中で、ある恋人同士が心中を起こし、男だけ助かるうとして、女の方がその男の足腰に取りすがつて、なんとかして自分だけ助かるうとする男

の腰に縋り付くような場面があつたりするわけです。どうもこれは、ある見方をすれば太宰のことをモデルにした熱海の心中未遂事件とかあるかもしれない。それで大きな亀裂が入りまして、そのあと実はその「失踪」という小説の中でも、ちよこつと出てますけど、中村地平が南方文学へ、都会の心理主義小説から南方文学へ転向していく大きなきっかけになつた事件でもあります。「北の太宰、南の地平」という発想は、どこから命名がされたかということも少し議論にもなつたんですけども、実際にはその「失踪」という小説の中では、「北枝の白き花」なる津軽の太宰に対して、南国の花として自分の位置付けをし、自分自身は南方文学へ大きく舵をとっていく。新しい文学への転向は、太宰治との亀裂が大きな原因になつていたわけです。お話をかえます。

一九四一年から四二年にかけての「戦争体験と文学」というところに進んでいきたいと思ひます。実際に南方文学というものを、自分の一種のトレードマークとして新しい文学を展開しようとした経緯はざつとかいつまんどお話ししましたけれども、実際にいよいよ戦争が始まつていく。一九四一年から四二年にかけて南方戦線への徴用と、シンガポールでの反日華僑の虐殺事件という話になつていきます。そこに進む前に、ここであつたん会場から質問をお受けします。

【館長】はい。一点お聞きしたいと思います。中村地平が戦後、宮崎に引き揚げてきてから、『河童の遠征』とか、『日向民話集』とか書いてるんですけど、台湾で過ごした時期に、その原住民の方々のこと、それから塩月桃甫からの影響、そういったものが日本に帰ってきて戦争で宮崎に疎開して、そのあと書いた作品にどういう影響を与えたのかっていうようなところを、ちょっと知りたいなっていうのがあります。その南方文学から、私小説へ転向したという分析がされてるんですけども、南方文学が、その後、本当にもう中村地平の中から消えてしまったのか、それともずっと何らかの形で残って、その後の作品にも影響を与えたのか、その辺がもしわかったら教えていただきたいと思っています。

【小松氏】僕たちが今年六月に『中村地平短編小説集』を復刻・出版したんですけど、その中の「告別式前後」っていう作品を読んでもらえれば、塩月と中村地平の台湾時代のこと、引き揚げてからのこと、死ぬまでのことがわかるので、どういう影響を受けてたかは、ぜひ読んで欲しいと思います。塩月赳、塩月桃甫の長男と地平は同級生だったので、いつもアトリエに遊びに行っていて、何かそこに原住民のものがいっぱいあったと、いろいろモデルが来てたとか、いろんな文献が残っていたので、塩月桃甫からの影響はかなり受けてます。

【河原氏】中村地平が南方文学の樹立というものを文章化したのは、実は一九四〇……そうだ、台湾に再度行ったあとですね。戻ってきて「長耳国漂流記」を『知性』という雑誌に発表するのですが、その発表する前の号で初めて、それを言うんですね。やはり台湾に行った、そしてそこで台湾を扱った小説を書くことが自分にとって非常に意味のあることだというふうに感じたんだろうと思います。ですから、いわば九州のことを書くのが南方文学の樹立では、私はないと思うんですね。むしろ九州のこと、自分の郷里のことを書くのは、地方文学としての樹立と思うんですね。意識として南方文学、彼の頭ん中にある南方文学は台湾だと思います。戦後は台湾が日本の植民地でなくなりますから、南方文学の樹立そのものは途切れてしまったと思います。

その代わり、この宮



崎及び九州の話をできるだけ彼は記録として残したい、皆さんに広めたいっていう意識が強くなったと、それはそれですばらしいことだと思います。

【小松氏】南方文学の定義が、結構いろんな研究者にインタビュー撮ったんですけど、それぞれちよつと違いました。そうですね。先生の考えだったり、台湾の研究者の人の考えだと、マレー半島やシンガポールの物語そして宮崎の物語もすべて入るという話もあったし、台湾のことっていう、結構南方文学の定義はまだ決まなくてもいいぐらいにあるのかなというふうに感じました。

【河原氏】だから具体的にどこまで意識してるかつてのは、彼自身細かくは書いてないんですね。

【小松氏】研究者それぞれで、その答えが違ってらっしゃるので、あと戦争によってのところ、ですかね。私小説変更したところはもう、映画でも描いたとおりなんすけれど、先生からじゃあ…、難しいですよ。

【河原氏】難しいですね。同じような質問は、日大（日本大学での上映会）でも出たんですよ。

【小松氏】でした。

【河原氏】なかなか答えにくい。

【小松氏】でも、僕は地平を追いかけて映画を作った感じでは、私小説や『日向民話集』だったり、地元、南方文学と日本の南進政策がやっぱりかぶってしまったので、そこ

で戦地でいろいろ見たことによって、そこでスイッチしたような感じはあります。

でも、スイッチするときでも「支那娘ジン」とか、「馬來人サーラム」とか、徴用後に『新潮』や『文芸』にその戦地のことを発表しながら、『日向』と『河童の遠征』を書いてる時期がかぶってるので、そこで、いちおうその戦地で見たことは書いて発表し、作品を選考しながらそのタイミングで宮崎に帰ってきてるので、やっぱりその本当に徴用後の二年間で、いろいろ変わっていった感じはあります。

【河原氏】報道班員として作家たちが南方にいったいくわけですが、彼らが行った先で、たくさんいろんなものを書いてる中で、地平はやっぱり違うんですね。生々しい状況というのをあえて避けてる。むしろ向こうの現地の人々の生活というものを、自分の生活と結びつけながら好意的に書いてる。

【小松氏】自分が関わった華僑や、自分と関わったマレーシア人の話を書いてます。

【河原氏】そう。だから、そういう意味では、読んで安心ですね。これが結構ね、ほかの徴用作家のなかには、戦意高揚のために書いた作品がたくさんあるんです。岡林先生だとその辺はよくご存じだと思います。

【岡林氏】そうですね。実際に「支那娘ジン」とか「華僑

の人たち」という作品を書いているんですけども、これは実際に現地で、いわゆる占領軍の侵略によつて被害をこうむった人たちを、現地の人たちの目から書いている作品として評価され、これはもちろん南方文学の対象にはならないわけでありすけれども、ここで、中村地平がこの「戦争体験と文学」の中に出てきました、一九四一年から四年の「南方戦線の徴用」というところを、再びドキュメンタリー映画の中の場面を、少し監督の方にコメントしていただきたいと思うんですが、昭和一六年一二月に、アフリカ丸でちょうど香港沖を通るときに、一二月の八日、いわゆる真珠湾攻撃の報が入るわけですね。その日の前後から、この戦争というものに対して、中村地平がすごくなんて言うかな、恐怖、戦争そのものを拒否する奇怪な行動をとるんですね。

実際、中村地平自身の文章じゃなくて、これは井伏鱒二の文章で、地平の発言として映画の中でも使ってるんです。それで戦争も知らない小松さんたちの、中村地平が、自然がこんなに美しいのに戦争をなぜするんだらうという、独白で語られているあの場面等の構成の仕方、あそこがこの独白を入れた監督の意図をお伺いしたいと思います。

【小松氏】はい。シンガポール編を撮影して、どう表現していくか、僕たちやっぱり表現者なんで右も左にも寄れず、やっぱり真ん中からしっかりと事実を伝えていく、そうい

う表現をしていきたいと思つてるときに、いろんな戦争を追っかけてしまうといろんな出来事がやっぱり分かつてきてしまつて、どう表現するかっていうのは毎回みんなですごく悩むんですけど、結果的にもう地平がどう思つて、どう生きたか、どう行動したかつていうところを出したかったので、やっぱりそこは地平のターニングポイントになるんではないかなと思つて使いました。

【岡林氏】実際は地平が書いてなくて、ずっと行動を一緒にした井伏鱒二の描写によつて、うまく脚色して本当のことを表現してくれたと思うんですけども。戦争の時代を、戦争を知らない若い世代が描くつてのはとても難しいと思うんですね。ちやうど今映画の話になったから、そこに再び話を進めていきたいと思ひます。映画の中で八紘一宇の塔の内部を流すところがあります。塔の中に入つていつて、日名子実三の彫刻についてのコメントとか含めまして、あそこは僕たちと違つて、それでも僕は昭和一七年生まれだから、戦争中に生まれた、戦前派と言われるほどの実感はないんですけども、やはり四〇代の小松さんたちが、あの映画で挿入したあの場面っていうのを、特にあの日名子さんという美術家としての、監督の目から見た、ただ単に歴史の遺物としてあれをとらえるだけじゃなくて、大々的に反戦思想みたいなものをモロに出してないんですけれども、若い編集者たちが作り上げた字幕スーパージョーの中に、あ

そこには昭和一五年当時の空気を持っていた、包んでいたっていうような表現があつて、精いっぱい、しかし胸に訴えるような場面であつた。八絃一字の塔の中にある彫刻の像の美的なもの、感覚的なものと、そして、政治的な意味合いについて小松さんの方から少し……。

【小松氏】はい。今回、宮崎市制一〇〇周年と置県一四〇年ということで八絃一字の塔の中の、日名子実三が作った作品レリーフを映画の中で、映画に出すのは初めてだったと思うんですけど、使わせていただきました。

日名子実三って一人のアーティスト、芸術家として作品は素晴らしくて、だけど僕たち世代ってあの塔のことを知ってるようで全然知らないんです。その辺、触っちゃいけない空気もあるので。ただ、日名子実三のアーティストとしての作品としては素晴らしいので、作品として映画の中で紹介させてもらって、実際に塔の中に入ったら、昭和一五年の紀元二六〇〇年祭のころの何か空気を感じたというか、そのまんまで、僕たち撮影組も結構驚いたんです。あれで映画が一本撮れるぐらいの、もちろん霧社事件でも一本撮れるぐらい。やっぱり作家の作品として見られてないところは、ちよつと同じアーティストとしてかわいそうだなっていうのもあつて、だから芸術作品としてどう見たかとか、そういうのをちよつと若い人たちに向けて示したかったですね。でも若い人にはなかなか映画見てもらえて

ない。

【岡林氏】実際は映画の中では、「昭和一五年当時の空気を今も内に抱いている。戦前から残るこの芸術作品と次の世代がどう向き合っていくのか」っていう字幕スパーを残しております。とても印象的であつたと思います。若い人も見えてるんですけど、ここでもう少しまた映画の方に話を進めたいと、小松さんに聞くんですが、やはり若い人たちに何か、僕の周りにもいるんですけど、映画ってこんな田舎で俳優さんもないのに、どうして作ればいいんですか、お金はどんなふうにするればいいですか、幾らぐらいの費用だったんだろうというふうに、直接疑問をぶつけてくる人もいたんですけど、今回の日州グループによる、小松さん率いる、このスタッフたちによって完成にまでこぎつけたんですが、実際に自分たちが映画を作りたいという若者たちに一つのヒントになるような、完成までのプロセスについて、もちろん脚本などの準備があつてロケがあつて編集があつて、さらに上映までしていくというように、なところを含めて、エピソード、裏話もあれば話していただけますか。

【小松氏】ドキュメンタリーっていう形、ノンフィクションで、事実を歴史とか人の記憶で追いかけていく形をとってるので俳優とか演者はいらなくて、台湾とか宮崎県もそうだし、昔を知る人たちやこういった研究者の人たち、行

政、図書館や美術館と協力させてもらって事実を暴いていくっていうのがドキュメンタリー映画のいちばん面白いところで、お金はめっちゃかかります。一〇〇人ぐらいの人が制作に関わって上映は八〇分しか使えないけど、その何十倍も撮ってるので、ほんと使えなかった場所もいっぱいあるし、ただ何かたまたま運よくいつもスポンサーが集まるんですよ。何十社か、いちおうこういうことをやりたいたってというプレゼンをさせてもらうと、ある程度企業さんたちから支援を得られる。どうやったらつくれるんだって言われても、たぶん、普通の人には作るのは結構難しいと思います。

【岡林氏】その資金集めに多くのスポンサーの方が賛同してくださったわけですけど、そのためにどんな形のプレゼンをしたんですか。資金集めの段階で、難しい話ですか。

【小松氏】とりあえず偉い人を待ち伏せしといて、とっ捕まえて「五分、話を聞いてください」と言って、情熱と、こういうことがしたくって、こういう人がいてこういう人がこんな台湾で評価されてるのに、日本の人は忘れてて、宮崎の人もあんまり知っている人がいないんですよ、みたいな。熱量ですかね。飲み会のときとかも、偉い人を見つけるとガンガン行きます。

でも、毎回二〇、三〇社の支援を取って作ってますけど、その三倍ぐらいの人に断わられてます。

【岡林氏】河原先生、映画に関して感想が何かあれば。

【河原氏】本当助かります。映画の影響力は計り知れないくらいあるわけですので。桃甫にしても、地平にしても、映画だから皆さん分かるわけで、東京の人たち、私たちの周りでは、桃甫も、地平も知ってる人を探すのは極めて困難な状態です。

【岡林氏】少し映画からまた離れて、「戦争体験と文学」に戻る前に、一九四一年から四二年にかけて南方戦線の徴用中に、シンガポールでの反日華僑の虐殺事件っていうものをモロに見てしまったことについて一言つけ加えます。地平はいわゆる戦争というものを、特にこの事件については一言も帰国してから触れてないんですね。だから、これが大きなターニングポイントになっているのかかわらず、僕たち研究家としては、その虐殺事件目撃の客観的な資料がなくて、何か、井伏鱒二の『徴用中のこと』などの傍証によって実証してるようなことでありますけども、この事件によって大きく中村地平の文学が変わっていくということについては間違いないと思います。

そして二番目からのお話に進めていきたいと思っています。昭和一七年末に帰国して「疎開・結婚・家庭人としての地平」っていうものが展開していくわけですけども、昭和一八年の二月には森代議士（森由紀夫）の娘さんとお見合いをして、すぐに結婚する。そして、昭和一九年には長女

弓子さんが生まれる。そして宮崎県に疎開して帰ってくる。そして、あの宮崎に帰ってきての話ですけども、また少し映画にも戻るけども、宮崎市が空襲に遭う事件、その映像がありました。小松さん、たくさんの爆弾が落とされるシーンというのは宮崎市の野島（のじま）、内海（うちうみ）だったんですか。空港、赤江空港（現宮崎空港）ではなかったんですか。

【小松氏】映画で使ったのは内海の機銃掃射をされる米軍のガンカメラと、あと赤江飛行場が空襲されてるところの米軍の映像は使いました。

【岡林氏】そして帰国して、宮崎で生活をしていく中で、もう一つ重要なことがあります。実はここで塩月桃甫との関係を。戦後、塩月桃甫も台湾から宮崎県に帰ってくる。それこそ当時は、荷物は三〇kg以内と、ごく少ない荷物しか持ってこれなくて大変だったようでありますけれども、宮崎に落ち着くときにも、戦災者用の、いや引揚げ者のバラック住宅の中に住んでいる。六畳一間に、あと炊事場がついてるような住居でした。実は塩月桃甫が住んでいるところを何度か、自分の恩師ですから、地平は訪問して、いろんな仕事を探してあげるんですね。それと別に、当中村地平は小説の書けなくなってた時期でもありまして、その芸術家の情熱っていうものはどっか胸の奥の方で澱んでいたなかで、ちょうど夏場にバラックの家を訪ねる

場面がありまして、塩月桃甫がパンツ一枚になって、ねじり鉢巻をしながら一生懸命に描いてる姿を見るわけです。その姿を見て、はたと中村地平自身は自分の芸術への、その創作への道はどうなってるか、という自らの姿に気づかされるところがあります。それは「告別式前後」という作品の中で書いております。塩月桃甫から中村地平につながる一つの重要な場面でもあり、それを画家として小松さんは、あの場面をどういうふうに見ましたか。

【小松氏】地平が帰ってきて、図書館長をやったり、戦後の復興の教育だったり、日向女子自由学園をつくったり、すごく忙しい時期。いろいろ戦争で本当にひどいものを見たから自分の力が及ぶ範囲で教育、文化、経済、宮崎の復興しようとしてるときに、ちょっと小説家としてあんまり書けない、活動できない時期に塩月桃甫を訪ねて、まだ本当に台湾時代と変わらないぐらいの創作への情熱がある。塩月桃甫はですね。当時、外地手当六割加俸の時代に、台北高等学校と台北第一中学校二校の先生をしてたんで、台北でも洋館の豪邸に住んで、芸者を連れ歩いて、毎日絵を描いて、すごい伝説がいっぱい残ってる。それを知ってる地平が戦後に引揚げ者住宅の六畳一間でド貧乏で絵を描いてる姿を見て、地平も作家としてまたやろうっていう、なんかそういうシーンですよ。そこは、地平にとっては戦後のターニングポイントだったのかなと。これは映画を見て

欲しいけど、「告別式前後」を読んでいただくのがいちばん当時の空気とか、当時の宮崎がいちばん伝わってくると思います。

【岡林氏】そしてそれと関連するんですけども、その中で、中村地平が塩月桃甫のために、当時高鍋中学校で非常勤の絵の先生をお世話するんですね。当時（旧制）高鍋中学校ですね。それで、そんなふうに一生涯、就職を世話した中村地平であつたんですけど、ある日突然、塩月桃甫が辞めたっていうふうな報が入るわけ。どうしたことかと思つて聞いたしてみると、「いや、僕はあの汽車通勤の時間に、絵を描く時間が奪われるんだよ。もっと描きたいんだよ」っていうような一言に、さらに中村地平にとつて寸鉄の響きがあつて、自分みずからに活を入れられたように捉えられた事件でもあつた。

これは「告別式前後」、お母さんが亡くなつてすぐ後に、塩月桃甫が亡くなりますので、そのことを書いた作品でありますけど、ぜひ読んでいただきたい。

それから、「戦争体験と文学」の三番目に入りますけども、その長女の危篤と生命の復活も、これも彼の文学への大きな転機を迎える事件であつたわけです。

実際、今からお話しますけども、このとき小林の方に母親と再疎開していた長女・弓子さんが、当時、疫痢と言つてましたかね、赤痢にかかつて、もう重篤な状態になつて

いる。地平は、それを遠く離れて宮崎市内から心配している。手紙は何度か小林の玲子夫人に宛てて、それが今日の特別展示室の中にも、その書簡がそのまま直に置いてありますので、これぜひ読んでいただきたいと思います。手紙の中の文章を見ると、とても中村地平の今までの作品の中に無かつた、子どもを思う気持ちがあんなにも切々と伝わってくる。涙が出るほど長女のことを心配してるのは当然でありますけども、かなり玲子さんに、奥さんに対して厳しい言葉を投げかけてるんですね。びっくりするようなところもありました。しかし、「子供の像」という作品の中で書いてますけども、これも映画の中で最後の方で取り上げてくださっているわけで、子どもが重篤な場面から復活する、彼自身の戦争体験、日本は負けたんだという、その敗戦、廃墟の中からの復活、敗戦の中からの文化復興、それらのきっかけになるような大きな自分の身の辺の体験であつただろうと思います。その長女がああな瀕死の状態から見事に立ち直つて、戦後マルマルとした肉付きのいい体で庭を走つてののを見て、思わず何かうれしく、言つたら不謹慎になるけれども、「敗戦もまた楽し。」というような言葉さえ使いながら、敗戦の中で自分も復活していくんだというような、ここはやっぱり監督としても大事なところと捉えて、とても感動的なシーンになっていると思います。その「子供の像」からさらに「八年間」とか、さらに大事

なことは私小説への転向というところでありました。実際に「山の中の古い池」は、戦争中に河童家族の一員という形でフィクションを使いながら真杉静枝のことも書いている。あるいは未完の小説として死後発見された「発端」は、真杉静枝との後日譚で、晩年に真杉静枝が癌になって、中村地平にも昔つき合いがあったんだろうという形で、手紙と御見舞のための奉加帳が回ってくるところも書いている。この「発端」という小説は、『ポリタイア』っていう雑誌の中で没後発表されたものでありますけれども、そのあたりを見るとやはり、彼が私小説で自分の身边をテーマに作品を展開していく作家になった背景として、やはり戦争体験というものがあつたことを改めて感じる場面であります。この戦後の作品について何か、河原先生なんかコメントしていただけると…。

【小松氏】今年地平の手紙がね、去年か、見つかりましたもんね。その時の。

【河原氏】そうそう。

【岡林氏】手紙のことね。

【河原氏】とにかく資料がね、まだまだ足りない。作品も「八年間」で、真杉のことも書いてるけれども、奥さんのことも書いてますよね。作家ですから半分真実で半分フィクションである部分があるから、そこをどうやって切り取り、理解していくかです。

【小松氏】先日、手紙が実際に見つかったじゃないですか。小林と行ったり来たりしてる、終戦前の状況の手紙の中に、普通に小林から宮崎市に帰る途中、高岡の花見のところでトラックが故障して、歩いて帰ってたら戦場坂のところで空襲に遭って夜中になっちゃいましたみたいに書いてあったり、弓子さんのことがこうでこうで、和田大佐に助けてもらった、軍医さんに助けてもらったとか、そういうのは、手紙のまんま小説になってる。だからたぶん、自分の小説はね、そのままじゃないかなと思います。

【岡林氏】実際の資料としてね、特別室の展示の中に入っておりますし、よく見ていただきますと、手紙の便箋はというと、「大政翼賛会宮崎支部」専用の便箋に書かれてるんですよね。いつまでも戦争を引きずっている背景も、戦時体制を引きずってる事実もありまして、やっぱり資料というものがいろんなものを語ってくれる意味で、今回の特別室での展示については、またもう一回、一回でわからないので僕もう二、三回見てみようと思っておりますし、さらに資料を使って新たな評伝の書き加えもまたできるような、そんな気さえます。

【小松氏】河原先生にぜひ質問ください。

【質問者Ⅰ】二つあるんですけど。私、大学時代から台湾にずっと居て、台湾に一二年ぐらい居て、最近宮崎に帰ってきたんです。二〇年ぐらい前に初めて台湾に行った時に

は、まだ日本語しゃべれるおじいちゃんおばあちゃんとかがいっぱいいいて、日本人ありがとうありがとうみたいな感じでした。いま台北に五〇〇〇人ぐらい日本人（現在は九五〇人以上）がいるんですけど、日本人同士でいただいたみな知り合いなんですよ。みんな保守的な考え方で。もともと私たちの時代って、日本は悪いことしたという教育ばかり受けたんですけど、台湾に留学して台湾に住んで、日本ってすごいと思っ、日本大好きになっ、帰ったんですよ。それで、八年前日本に帰ってきて、何か台湾にいる日本人のその空気感と全然違っ、日本人って日本にすごい自信がなくて、それで、私こんがらがってしまったんです。今も、小松先生の映画「塩月桃甫」だったりと、映画「中村地平」もそうだし、あと映画「セデック・バレ」（霧社事件を描いた台湾映画）とかそういうのを観て、やっぱり日本って悪いことしたんだという気持ちもどんどん増えてきて。なんかそういう、この今の私の頭がこんがらがっている感じを、先生たちもたぶん持つてらっしゃると思うんですよ。さつき小松さんが言ったのとちよつとかぶるんですけど。それと文学と、どうやって両立されてるのか。それが一つと、あと大学のときに、台湾の先生に教えてもらって、私の場合は大学の卒業論文は「日本統治時代のインフラ」というのを書いてたんですけど、全然資料がなくて、台湾に行っ、邱永漢先生の図書館とか、あちこち探

してもなかなか資料がなくて、河原先生すごい長い間勉強されてると思うんですけど、そういう資料とかを、どうやって探して今に至ってるのかなと思っ、質問しました。【河原氏】後の話の方が、お答えしやすいです。私が台湾のことをやり始めたときには、本当に資料がない。書店へ行っても何もありません。先行研究もないし、だから資料集めでもまず苦勞しました。台湾に行くたびに、クーリンチエ（牯嶺街）というところに行きました。古本屋があり、路上での販売もあるんですよ。雨が降れば路上ですから店が出ないんですけど、リヤカー一つに積んでくるような、そこに時間のある限り行っ、それでかき集めて、地方都市でもそういうところへ行っ、かき集めて、それでも文学資料はないんですね。あつても、汚かったり破けてたりでした。台湾大学の図書館には幸いにして、その時に歴史研究で有名な方が館長



だったんで、それで書庫にまで自由に入れていただいて、それから考古人類学系の図書室にも入れてもらえました。なおかつ中央研究院の方も民族学研究所とか、文哲研究所とか、いろんなところに行きました。とにかく足で動くしかない。それで、集めた資料は台湾から送り出すんですけど、印刷品として送り出せるのは五kgまで。五kgってほんのちよつとなんです。ですから、行くたびに買ってくる、あるいは貰ってきたりする。多いときは四〇箱ぐらい送り出すという感じで。

幸いいろんな人と出会って、当時まだ文学者で健在な方々もいたので、そういう人たちの縁故で、本当に今では会えないような方々にお会いして、ですから台湾文学研究を手がけた段階が早くてよかったということです。それが大きな言わば財産であり収穫です。台湾文学を手がけ始めたんですけれど、最初はわからないんですね。わかる範囲で、とにかくまとめていくという感じでした。今みたいにネットで調べるなんて簡単にできるわけじゃないですから、大変でした。

一方、こういうスタンスで研究するかは大事なことで、当時は戒厳令下でもありますから、文学者の中には警戒されて、なかなか会ってもらえなかったりすることもありました。日本人の台湾文学研究というのが、どうしても警戒されるんですね。それから、台湾の学会で発表しても、日

本人としての限界じゃないかって後で言われたりするんですね。とにかく中立的にどこを、どういう研究をするかということを常に考えながらやってきました。そういうぶれないような見方をするのが、研究を長くできた秘訣だと思います。

歴史研究も台湾史の研究自体は、台湾では当時まずできない状態でした。ましてや文学の方のところ、特に日本統治時代の台湾文学研究は、ほとんどやられていなかった状態です。ですから、そういう中で台湾に頻繁に行けたのと、大学院に入ったときは大学の先生が理解のある方で、「自分の授業には出なくてもいい。他の先生の授業に出たら、そのレポートをコピーして同じように出してくれればいい」と言ってくださり、単位をそれで頂戴して、半年ぐらいいは台湾に行ったり来たり出来たのが研究するには非常に有り難かったです。

とにかく、資料はどこにあるかと探し回る。日本近代文学館がすでに出来ていましたから、文学館の書庫に入れてもらって、探しました。一冊一冊手に取ってみると、思いがけない資料にぶつかる。あとは日本国内でも古本屋めぐりをしたり。東京では毎週のように古書の即売展がありますから、そういうところでも資料収集に努めました。とにかく集められるだけ集めて、それでそうしてうちに輪郭が見えてくるという感じでした。だからずいぶん時間はか

かりましたが、幸いなことに自分の前に台湾文学を研究してる者は全くというほどいないので、先行研究を気にしないで自分のペースでできたっていうのは有り難いです。今だったら、例えば霧社事件の研究をするとなると、霧社事件に関する研究は実に多いわけですね。それらを読まなきゃいけないんですけど、そういうものを読まずに、物が書けたからスピーディーにできたという感じです。他に、ご質問があれば。

【質問者Ⅱ】一つだけお聞きしたいんですが、河原先生にですね。台湾における、卒業生の中にですね、作家にもなられた邱永漢さんとかいらつしやいますね。そして、小松さんの映画のポスターのいちばん右に中川一政さん、その彼の装幀された本が相当数あると思うんですね。ですから中川一政さんの輪郭というか、そういうものを少し教えていただければ。

【河原氏】それは、…分からないです。小松さん…。

【小松氏】それは仲良しだったからでは。紀元二六〇〇年祭の前年の昭和一四年に、日向観光協会が中村地平と一緒に、井伏鱒二と上泉秀信と岡田三郎と尾崎士郎と中川一政を呼んで、それ地平が選んでたので。戦前の地平の本の装幀は、中川一政がかなり多いですよ。

【河原氏】そうそう、戦前にかなり、ええ。

【小松氏】戦後は塩月桃甫が描くことが多いですね。

【河原氏】かなり出てますね。

【質問者Ⅱ】ですから、午前中にいただいたこの資料の中でも、塩月桃甫さんの装幀、表紙がたくさんあるのは分かりますが、この中川一政さんがどうしても気になってですね、お聞きしたところです。

【小松氏】中川一政は、今ではメジャーな画家ですね。でもたぶん、杉並文士というんですかね、あの辺のグループで仲が良かったっていうことですよ。装幀をあれだけ描いて。

【河原氏】本当に、本来ならば、彼に装幀してもらうなんて相当高いですよ。

【小松氏】当時みんな若かったから。でも若山牧水の本の装幀の中にも中川一政ありました。

【質問者Ⅱ】僕は、作家の向田邦子さんの家に行ったときに、入ってすぐに中川一政さんの絵がありました。ものすごく印象に残ってるんですね。

【岡林氏】はい。神奈川にあるね、真鶴町（中川一政美術館）に。

【河原氏】そう。素晴らしい絵がたくさんありますよ。

【質問者Ⅱ】ありがとうございます。

【質問者Ⅲ】ちよつと二つあって、どなたでもいいんですけど、今日この手元の資料にある、これ「考えてみよう」のところに、「弱者であつたことが文学の世界的出発点」つ

ていうのがあって、岡林さんの資料なので、岡林さんの考え方なのかなとは思いうんですけれども。何かこの話、まだ何か無茶苦茶だったっていうことがですね、その中であんまりピンときてないところもあって、太宰治はそんな弱者のようなふりをして文学を書いて、それが「人間失格」のような形で今でも高校生が読書感想文で書くというような話はわかるんですけど、中村地平も弱者であると捉えるっていうことに対する考え方を、この後もしかしたら話があるのかもしれませんが、その点をちよつと聞きたいなっていうのが一つと。

もう一つは、さつき研究に携わっても何十年とか、大変なご苦労というかですね、お話を聞きました、それから映画の撮影に関する裏話もありましたけれども、何かこう、一方で、いかに明らかに出来ていないことが多いとか、いかに撮れないものが多いかっていうことの自覚というか、葛藤のようなものもあったと思うんですね。幾ら調べても調べても、わからないっていうのがたぶん研究だったと思いますし、映画もですね、撮ってるもの以上に短いアップしなくちゃいけないから、だいたい切り捨てた形でなってると思うんですね。でも、論文を書く、論文にまとめるとか、映画にまとめるというその喜びもあると思うんですけど。わからないとかですね、捉えきれないなっていうその葛藤の部分で、何かお考えがあったら聞きたい

なと思います。以上です。

【小松氏】弱者と捉えているのはたぶん、岡林先生の方で、僕は北のぼんぼん、南のぼんぼんって思ってたんで、太宰と地平は。あんまり弱者だとは思ってなかった。

【岡林氏】文学作品のほとんどが、弱者であることの認識があるからこそ、また弱者であるふりをして文学作品を作るってことも含めて、それは可能であると思います。ずっと見てると、すごく強いと思った中村地平は、図書館で働く場面ですね。図書館の業務に関してはかなり実務面での強さを感じるところがありますけれども、やはり銀行に関しては、病気の進行もあったけれど「弱さ」が。

言わせてもらえば、文学作品を作っていくっていうことの基底にあるのは、僕自身の論文にもあるように、そう、この弱者であることが文学の出発点に。そもそも台北高等学校の受験のところから始まって、それで彼が初期に書いてる「悪夢」とか「陽なた丘の少女」とか、もうことごとく人間の罪、弱さについて、そこを出発点とした作品が多いというのを見ますからね。反対に「南方郵信」とか「土龍どんもぼっくり」っていうのは、意外と人間の強さっていうものの、永遠の相の下で古代南方人の強さっていうたものを底力として見ているところもあると思います。以上、わたしの持論ですが。

【河原氏】葛藤の件ですけども、調べた結果どうしても

書けないものつてあります。これを書いたら個人の尊厳を傷つけるといふものがありますし、これを発表すると社会的にかなりマイナスな評価というか、誤解を招きやすいというのがあります。その辺のギリギリのところでは、いろいろどうしようかなあって考えるんですが、時期が経つと書けるものもあります。

映画の中でも、霧社事件についての資料は、小松監督にはお見せしたんですが、実に生々しい写真があります。首だけいっぱいあるとか、あるいはミイラ化した死体があるとか、そういうものがあります。それから、そういうものがあるんですけども、出せないものは出さない、出さないほうが賢明だと判断することがあります。

研究者というのは意外といろんなことを暴露したがるんですね。中にはこれを出したら、本当に本人を傷つけるものもあります。台湾の研究者の中には平気でそれを発表する人もいます。けれども、私としては、そこは線引きをきちっとしているつもりです。

【小松氏】表現の自由、僕も本業がアーティストなんで、やっちゃいたいっていう気持ちはあるんですけど。例え話で言うと、霧社事件すら前は触れなかった時代があつて、今はちよつと触つて確かに当時の映像だったり写真を手に入れて全部出すことも一瞬は考えました。制作中は、仲間たちと、東京の先生たち含めて、僕は勝手に「審査会」つ

て呼んでるんですけど、僕がちゃんと中立から表現できてるかどうかを審査してもらう人達が一〇人ぐらいいて、そこに見せたときに結構チェック・意見をもらうんですけど、例え話でいうと、霧社事件の、最初僕は、反抗した原住民が縛られて集められて、日本の警察官・軍隊かどっちかに囲まれてる写真を使おうとしていました。だけど、その審査会から来た意見の一つでやっぱり止めようと。ちよつと心に響いたのは、ああいう事件が起きたこともあったけど、当時、その蕃地・蕃社には警察官が駐在して日本人の教育をしたりしてたけど、原住民の子供が病氣になったときに、もう必死で台北の町まで行つて薬を買つてきて、原住民の子供を治してあげたりとか、なんかすごくいい話もたくさんあるのに、その写真一枚ですべてが見る人が霧社事件オ・ンリーでぶつ飛んでしまう、という意見を言われたときに、本当に自分が真ん中から表現できているかっていうのは、もう毎回すごく何かわからなくなっていく。自分が、それはすごくいつも闘っています。

【岡林氏】監督の証言としてはいちばん重みがあり、初めて聞きました。その話は。そろそろ時間が参りましたのでまとめなきゃいけないんですけども、先ほどの台湾の大学に留学した方の質問の中で、やっぱり一番目の質問に関しては、僕たちが、例えば台湾に今行つても、道なんか迷つてると丁寧を教えてくれていろいろと親切なんだけど、一

方で、例えば旧日本家屋の写真をどんどん撮っていると、お前何してるんだというふうに言われることもある。

僕がいちばん現代の台湾の人々の心、心情を見事に伝えてくれると思う、現代の短歌を披露します。

『台湾万葉集』という短歌集の中の一首で、「すめらぎ」ってのは天皇陛下のことです。

すめらぎと曾（かつ）て崇（あが）めし老人の葬儀の
テレビに瞼（まぶた）しめらす

要するに、天皇陛下の、昭和天皇の葬式、テレビに映った葬式で涙している。それを、「曾て崇めし老人の」という、そういう表現の中に、すべての万感の思いが込められているような気がいたしまして、先ほどの一番目の質問に対する答えとしておきます。

【小松氏】まだ質問あれば河原先生に、もうせっかくなので。

【質問者Ⅳ】ありがとうございます。私、昭和二三年の生まれなんですけども、川南町という、〇〇なんか〇〇があった。昭和二三年なので今七六歳になりますけども。お三方から、これは宮崎県の出身の方、台湾との交流とかいろいろ聞きました、非常に感慨深い思いに浸っております。考えてみますと、私も含めて、子どもも孫も、これから先、三人の話をされたようなことが自分の原体験として、何か自分の生き方を変えることがあるんだろうかと思つ

とったんですよ。私も話を聞きながら、霧社事件とか、それから太宰治の「喝采」とか分らないもんですから、スマホ横に置いてたんですけど、スマホを見てわかったような気になる。

一方で、やっぱりこうして研究者の方や、美術家の方や、いろんな方法で資料を通して自分で勉強して皆さんに伝えようとしておられる。本当に敬服しました。これからも三人のご活躍をお祈りするんですけども、私は宮崎においては図書館が文学館なんだと思っております。ちょうど関係の方もおられますので、ぜひ図書館のあり方として、資料の収集、そのの発表、それを後世にどういうふうに伝えていくのか。

図書館の、こうしてたくさん来ておられますんで、これから大事にして、図書館の関係の方、ひいては自治体の資料の収集、また発信そういうことに頑張って欲しいなと考え



たところですよ。ありがとうございました。

【岡林氏】ありがとうございます。なければ、もう一人ありますよですよ。

【質問者V】僕は映画を見て、中村地平さんとか南方文学って初めて知ったんですけど、南方文学って、文学の一ジャンルなのかなと思って調べたら、プロレタリア文学だとか、郷土文学とか、戦争文学とかいろいろありますけど、ただ調べると中村地平さんの名前しか出てこない。しかもその中村地平さんのある一時期の作品傾向の話なんだと。その南方文学をどう捉えるかってのがよくわからないのが一つです。

あともう一つは、中村地平さんの、特に宮崎に帰ってきたから以降については、果たして文学者、もしくは小説家と言えるのかなというのが正直あって。郷土である宮崎の文学者がいて欲しいって気持ちはあるんですけど、ただ何か冷静に見ると、果たしてこの方は途中からもしかして文学者じゃなかったんじゃないかなっていう気もしてまして。その辺のところを忌憚なく教えていただきたい。

【河原氏】文学を志す文学者になりたいという気持ちは、地平の心の中に根強くずっとあったと思います。ただ、東京を離れて宮崎に戻ってきてからは、中央文壇といわば疎遠になる。しかも宮崎での様々な文化活動に携わるし、咯血したということもあって、自分が考えてるような創作活

動には携われなくなったというふうに言える。だから、多分に心残りだったと思います。

それで、南方文学というのは、プロレタリア文学とか自然主義文学とかそういう分野の範疇で同時に並べられるものではないというのは、おっしゃるとおりです。ですから、あくまでもこれは一般受けするような表現ではないというふうに考えています。それについて、先ほどもお話ししましたように、南方文学って何なのかということはそう簡単には明確にできないと、そういうふうに私は考えております。ありがとうございます。

【岡林氏】はい、他にはございませんでしたら、ちょうど時間になりましたので、それでは、よろしゅうございますかね。では、どうも長い間ありがとうございました。

【司会者】三人の方々、長い時間にわたって地平について語っていただき、ありがとうございます。

※文中の〇〇は、筆耕時に聞き取れなかった部分。

※※文中の写真は、いづれも鼎談会時のもの。

